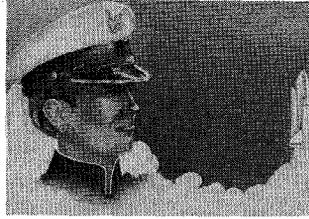


聖徒の道

3 1983





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バック
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリ
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ビネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
デザイナー：
ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・ブライス

も く じ

悔い改めの福音	スベンサー・W・キンボール	1
小さな粘土細工の羊	ラッセル・オズモンド	8
私たちの結婚を救った原則	ジュディス・ロング	10
モルモネード		15
質疑応答	ケネス・H・ビーズリー ロイ・W・ドクシー	16
インタビュー・新しい時代の扶助協会	中央扶助協会会長	20
両親を敬いなさい	ヒュー・W・ピノック	26
「堅物」だっていいじゃないか	ウィリアム・グラント・ バンガーター	29
コーディネーの夢	リチャード・M・ロムニー	32
奉仕の喜びを味わう	ジャネット・トーマス	36
わたしのお友だちへ	バーバラ・ビー・スミス	39
トロフィー	ベティ・ルー・メル	44
おもちゃぼこ	ロベルタ・エル・フェアラル	49
チャーチニュース・ローカルページ		50

1983年3月号 聖徒の道 第27巻第3号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社
定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0551 JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留が振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会・東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。

悔い改めの福音

大管長 スペンサー・W・キンボール



天父が私たちに悔い改めの福音を与えて下さったことを心から感謝しています。悔い改めの福音は、福音の計画の中心をなすものです。悔い改めは、成長するための主の律法であり、進歩するための主の原則、幸福になるための主の計画であります。罪や過ちを犯してしまっても、心から十分に悔い改める者には赦しが与えられるという主の確かな約束に、ただただ感謝

するばかりです。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11:28)と主は言っておられます。

悔い改めに関しては、聖典の各所で、生活を改め、主の良き教えに沿って歩むよう命じられていますが、同時に、そうする者には赦しが与えられるという主の約束も各

悔い改めの福音

所に述べられているのです。何とも素晴らしいことではありませんか。

神はいつくしみ深い御方です。できることなら赦しを与えたいと思っておられます。私たちが完全な者となり、自分を律する者となるよう願っておられるのです。サタンやそのほかの力に私たちが左右されることを、主は望んでおられません。天父の戒めを守ることは、自分を管理する唯一の道であり、この世にあっても永遠にも、喜びと真理を見だし、達成感を味わうことのできる唯一の道であることに、私たちは気づかなければなりません。

このようなわけで、主は、この最後の神権時代に新たにこれらの真理を授けて、こう言われました。「汝ら今の代の人々に向けて、悔改めのほか何事をも語るべからず。わが誠命を守りまたわが誠命に従いてわが業を起すを助けよ。」(教義と聖約6:9) 「これを以て、汝らは今の世の人々に悔改めを叫ばんために召さるるなり。」(教義と聖約18:14) また、初期の聖徒たちがミズーリへ向かう時に、主は指導者たちに次のように教えられました。

「彼らは行く行く教えを説きて至る所に真理の証をなし、富める者、位高き者、卑しき者、貧しき者を訪いて悔改めを為さしむべし。

世に住む民悔い改むる心あらば、彼らに教会を建てさせよ。」(教義と聖約58:47-48)

きょうこそ私たちの悔い改めの日。私たち一人一人が自分の生活をよく省みて改めるべき点を見つけ、それを実行する時です。過ちを犯してしまった時には、悔い改め

悔い改めの福音は、福音の計画の中心をなすものです。悔い改めは、成長するための主の律法であり、進歩するための主の原則、幸福になるための主の計画であります。

の道に進まなければなりません。赦しをもたらすこの原則に対して、私たちは自分なりの証を持つ必要があるでしょう。また悔い改めの原則は、自らの生活に正しく応用するだけにとどまらず他の人々の生活にも取り入れるべきものであることを、私たち一人一人が理解する必要があります。このように、末日聖徒イエス・キリスト教会の使命は、すべての人々に悔い改めを促し、ひとりでも多くの人が福音に従って生活することの喜びを味わえるようにすることです。あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々に向かって、悔い改めが叫ばれなければならないのです。

罪に染まったこの世に向かって悔い改めの声を上げることを、私たちは失礼なことだとは思いません。敵は陰険かつ巧妙です。敵は、立派な男性女性がある日突然に大きな罪を犯すようなことはしないことを承知していますから、徐々に彼らを自分の方に引っぱり、真実めかしいことをささやきかけてついには自分の虜としてしまうのです。

昔あった罪がいまだに存在していることを心に留められた主は、改めてこう戒めら



れました。

「汝ら人を殺すなかれ。……」

汝ら盗むなかれ。……

汝ら偽りを言うなかれ。……

汝ら姦淫することなかれ。……

汝ら隣人の悪口を言いましたこれに害を与えることなかれ。……

汝らもしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり。

見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、彼らに与えざるべからざる扶助のために、……己が財物を神に奉獻せよ。

汝のこころの中に高慢あるべからず。……
汝怠惰なることなかれ。……

汝相愛して共にこの世に生きよ。……

汝の受けたところのもの、すなわちわが聖典の中にて律法として汝に与えられたる事は、すべからく取りて以てわが教会を支配する律法となすべし。

この律法に従いて行う者は救われ、これに従わざる者にしてもし引きつずき従わざれば救われざるべし。」(教義と聖約42:18—30, 40—60)

性的な罪は今の時代の最もゆゆしい罪です。悲しいかな、映画やテレビ、ポピュラー音楽、本、雑誌などは、性の倒錯を美しく飾り立てて表現しているようです。そして、「神聖なものなどこの世には存在しないんだ」「結婚の誓いだって同じさ」といった考え方を人々の心に吹き込んでるように思います。肉欲にふける女性がヒロインとして当然のことと考えられ、肉欲にふける主人公を毒にも薬にもならない人間などと描いています。イザヤはそのような人たちのことをこう言っています。「彼らは悪を

呼んで善といい、善を呼んで悪といい……」

(イザヤ5:20)

天父の基本となる教えは、昨日も今日もまた永遠に変わりません。世の中が罪惡一色に塗りつぶされようと、主の教会は主の教えを変えることはないでしょう。

天父が私たちに悔い改めの賜を与えて下さったことは、何という祝福でしょう。私たちにとって毎日が進歩改善の時であることを認めない者は、何と惨めなことでしょう。「しかしながら、これまでに律法を与えられ、まことにわれわれと同じ様にあらゆる神の命令を受けていても、これらの命令に背き、その試しの生涯を徒らにすごす者は禍なるかな。その有様は恐ろしいものであるからである。」(II ニーファイ9:27)

悔い改めの過程は、まず罪をはっきりと認めることから始まります。罪を自覚することで、心や精神が痛み、時には肉体にさえ痛みを感じることもあるかもしれません。そうした自分自身を背負って生きていくには、罪を犯した人は次のいずれかの道を進むことになります。まず心に鎮静剤を射って善悪を判断する力を鈍らせ、感覚を弱め、罪を犯し続けるという道です。この道を選んだ人はやがて罪に対して無感覚となり、ついには悔い改めたいという思いさえなくしてしまいます。もう一方の道は、罪を深く悔い、心から悲しんで悔い改め、やがて赦しを得るという道です。

悔い改めない人に赦しは決して与えられません。このことを忘れないで下さい。そして悔い改めは、罪の言い訳や正当化をやめて、素直に自らの行ないをあるがままに受け入れられるようになって初めてもたら

悔い改めの福音

されるのです。攻撃的な態度をとったり、罪の重大さを合理化したり、あるいは罪の大きさを軽々しく考えたりすることなく、自分が罪を犯したことを素直に認めなければなりません。また自分の犯した罪が実際ゆゆしいものであり、その大きさを偽って言うことはできないことを心に留めなければなりません。この道を選び、生活を改善しようとする人は、悔い改めは大変なことだと最初は思うでしょう。しかし、悔い改めの結ぶ実を味わううちに、この道こそ本当に自分が望んでいたものであることが分かってくるのです。

使徒パウロはこう書いています。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き……。」(IIコリント7:10) 自分と他人とをどれだけ傷つけたか自覚し、そしてそのことを深く悲しむ思いが心に湧き上がってきた時、私たちは、罪の縄目から解き放ってくれる悔い改めの道への心の準備ができるのです。

悔い改めの次の段階は、罪を捨てることです。主は予言者ジョセフ・スミスにこう言われました。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58:43) また主は姦淫の罪を犯した女の人の人に向かって、「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」(ヨハネ8:11)と言われました。

祈りは、悔い改めのどの段階でも大切なものですが、とりわけ罪を捨てるために欠くことができません。罪と関係ある人たちや場所、もの、状態などから遠ざかるために、しばしば祈る必要があるでしょう。こ

罪と関係ある人たちや場所、もの、状態などから遠ざかるために、しばしば祈る必要があるでしょう。

れが基本です。私たちは、悪い環境を良い環境に置き換えることで、過去の罪との間に境界線を引くことができます。

次の段階である罪の告白は、悔い改めの過程できわめて重要なものです。まず自身に罪を告白し、認めてから、真剣に悔い改めの階段を昇っていくのです。天父にも自分の罪を告白しなければなりません。特に性的な罪などのようにゆゆしい罪については、監督にも告白する必要があります。

イノスのように、まず主の下に行って誠心誠意祈ります。それから、必要があれば監督のところに行きます。主は首尾一貫した秩序ある計画を持っておられ、進歩と成長の偉大な律法である悔い改めの律法に基づいて、私たちに祝福を与えて下さいます。教会員にはすべて、神権の召しによって、「イスラエルの判事」として聖任された監督あるいは支部長が与えられています。このような事柄について、監督は私たちにとって地上における最高の友といえるでしょう。監督は、私たちの生活に恵みをもたらすために主のみたまを受けて働き、すべての事柄の秘密を固く守る人です。

罪を悲しみ、罪を捨て、告白した次に来



るのは、償いの大原則です。損なわれたものを、できる限り元の状態にもどす努力をします。盗みをしたのであれば、盗んだものを返します。うそや悪口を言って傷つけたのであれば、事実が根を下ろすまで、できることをすべて行ないます。

殺人がそれほどゆゆしい罪であるときれる理由のひとつは、奪った命を元通りにすることができないからでしょう。完全な償いは不可能です。同じように、失った貞操は元にもどすことができません。しかし、心から悔い改めた人であれば、自分にできる最大限のことをして償うことです。予言者エゼキエルはこう教えています。「すなわちその悪人が……奪った物をもどし、命の定めに進み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる……」（エゼキエル33：15）

最後の段階は、御父のみこころを行なうことです。これは特に大切です。主は、この末日に予言者ジョセフ・スミスに言われました。

「すなわち、主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。さりながら、悔い改めて主の誠命を行う者は赦される。」（教義と聖約1：31-32）

主が約束をたがわれることはありません。「もし汝善を行わんと欲し誠に終りまで変ることなく忠信ならば、神の王国に救われるべし。」（教義と聖約6：13）

人が天父の教えに一致した生活をしようとしている時、善き業に励むその人の生活が、悔い改めたことを証明してくれます。救い主はこう言っておられます。

「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。¹⁶茨からぶどうを、あざ

みからいちじくを集める者があるろうか。

良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。

このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。」（マタイ7：16, 18, 20）

必要であれば、思いや考え、標準、行ないまでも完全に变えて、救い主が下された務めを果たさなければなりません。主は私たちにこう言われています。「故に、われまたは天にまします汝らの父が完全なるごとく、汝らもまた完全とならんことを。」（III ニーファイ12：48）この段階では、できることは何でもするように求められます。ですから、もし什分の一を納めることを拒んだり、出席すべき集会に参加しなかったり、安息日を守らない、祈りをしない、その他の責任を怠るといったことがあるなら、その人は完全に悔い改めたことにはなりません、悔い改めの律法のこれら基本的な事柄に、私たちがどの程度従順に従うか、主はよく御存じです。これこそまさしく神の与えたもうた進歩と達成の律法です。

このように変わることで、人にもっと関心を向けることができるようになり、自分の受けている祝福を人にも味わってもらいたいと望むようにさえます。これについて主は、私たちが人々を主の下に連れて行き、世の人々に向かって熱心に証を宣べ伝えるなら、私たちの罪はもっと早く赦されると、いつくしみを込めて語っておられます。（教義と聖約84：61参照）

悔い改めは、喜ばしい愛にあふれた律法です。この素晴らしい原則は、この地上に生を受けた数多くの天父の子らに適用され、

悔い改めの福音

落胆したり、自分はふさわしくないという気持ちになったりした時には、天父に心を向け、助けを願う必要があるでしょう。

彼らもまた喜びと恵みを得ることができるのです。私たちも行ってそのようにしようではありませんか。幾百万もの聖徒たちが悔い改めの道に進むことによって平安を見だしています。また、悔い改めの福音をガイドとして神のみ言葉に従って歩み、個人の進歩を遂げることによって、麗しく満ち足りた豊かな人生を送っています。

しかし、悔い改めない時には、懲らしめが与えられ、祝福と進歩は拒まれることを、主は私たちにはっきりと告げておられます。主は、罪につかっている人を赦すことはできない、と教えておられます。主に可能なのは、捨てた罪の結果から人々を救うところまでです。主はこう明言しておられます。「もし彼らわが言を聞かざればわが血彼らを潔めざらん。」(教義と聖約29:17) 今この場で、主の教えを受け入れる様々な方法によく耳を傾けて下さい。

「この故に、汝らの子らに教えよ、すなわちすべての人は何所にあるもことごとく悔い改めざるべからず。然らざれば彼ら決して神の王国を嗣ぐこと能わず。汚れたる者は王国に住むこと能わず、すなわち神の

御前に住むこと能わざればなり。」(モーセ6:57) 救い主によってもたらされた偉大にして驚嘆すべき贖いの力も、私たちの悔い改めがなければ、十分な効力を発揮できないのです。このことについて主は誤解がないように詳しいところまで、いつくしみを込めてしかも単刀直入に述べておられます。

「この故に今われ汝に命ず、悔い改めよ。……汝の痛苦甚しからざらんがために悔い改めよ。すなわちその痛苦の如何に甚しきかを汝知らず、その如何に強烈なるかを汝知らず、また如何に堪え難きかを汝知らざるなり。

見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。

されど、人もし悔い改めずば誠にわれと同じ苦しみを受けざるべからず。

その苦しみたるや、われ神、すなわちすべての中最も大なる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の毛孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ……

然はあれども、父なる神は贖むべきかな。さればわれはこの苦しみをなめ、人の子らの為に準備を為し終りたり。」(教義と聖約19:15-19)

主が私たちのために準備をなし終えられたとは、何とも喜ばしきことではないでしょうか。今は私たちが自分のために準備をなし終える時です。主の愛にあふれた赦しを受けることによって、その準備を終えようではありませんか。主は心から悔い改め



るすべての人にそのような赦しを与えようとしておられます。

落胆したり、自分はふさわしくないという気持ちになったりした時には、天父に心に向け、助けを願う必要があるでしょう。主はきっと力を貸して下さいます。約束を破ることはない、主は私たちにはっきり告げておられます。ですから、みたまの励ましがある限り、そこには希望があります。しかし、「これでいいのだ」とか「自分は違う」「神がこの道を押つけた」「親や教育のせいだ」などと言うようになると、私たちと神との関係は悲劇的な方へとどんどん進んでしまいます。

熱心に天父の助けを求めて、悔い改めの

階段をのぼるなら、そこにこの世から永遠にわたる平安と喜びを見いだすことでしよう。

悔い改めの平安と赦しの喜びを自分で味わい、さらにその方法を人々に知らせることは、私たちに与えられた素晴らしい特権です。ひとたびその平安を見いだした私たちは、それについて証し、どうしたら手に入れることができるかを、人々に教えられるようにならなければなりません。これを、堪忍と柔和の心、万人に対する純粋なキリストの愛をもって行なうのです。これこそ、末日聖徒である私たちの召しであり、大きな喜びと祝福の源なのです。

ホームティーチャーへの提案

●強調すべき点

1. 神は赦したいと思っておられる。神は私たちが完全な者となり、自分をコントロールすることができるようになることを望んでおられる。
2. 悔い改めは、罪を認めることから始まる。言い訳をして行ないを正当化しているうちは、悔い改めの道に入れない。
3. 罪を捨てるために、その罪と関係ある人や場所、もの、状態から遠ざからなければならないことがよくある。
4. 罪を自覚し、天父に告白しなければならない。重大な罪については、監督にも告白しなければならない。
5. できる限り罪の償いをする。善き業に励む生活が、悔い改めたことを証明し

てくれる。

6. 罪につかっている私たちを赦すことは、主にも不可能なことである。主におできになるのは、捨てた罪から私たちを救うところまでである。救い主の贖いは、私たちが悔い改めて初めて十分な効力を発揮する。
7. 熱心に天父の助けを求め、悔い改めの段階を進むなら、この世と永遠にわたる平安と喜びを見いだす。

●話し合いを進めるために

1. 悔い改めを通して得た祝福について、自分の経験や感じていることを話す。
2. このメッセージにある聖句や言葉で、家族と一緒に読み、話し合いたいものはないだろうか。
3. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要はないだろうか。

小さな 粘土細工の羊

ラッセル・オズモンド

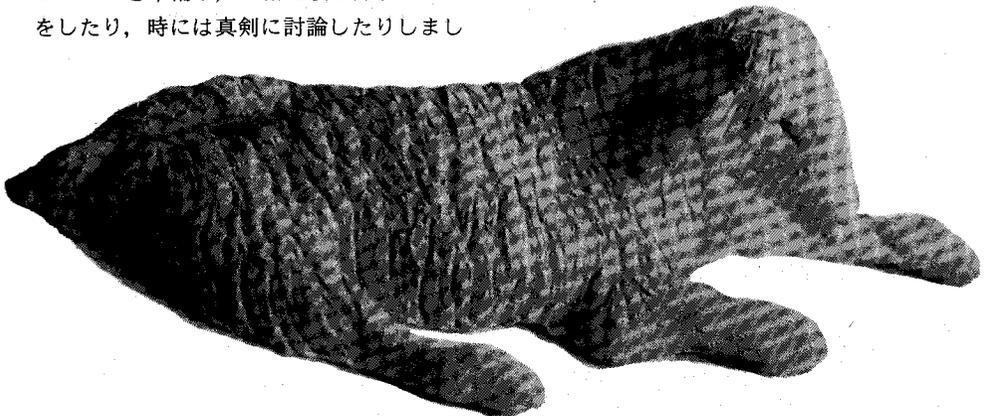
私の机の上には手作りの、少し形がくずれた小さな粘土細工の羊が置かれています。その羊は、毎日をいかに生きるかを、はっきりと私に教えてくれるものです。

1971年から1972年にかけて、私はアメリカ空軍の大きな訓練センターに駐留していました。その住民の大半は、いつも孤独で、時には情緒不安定になる独身の成人たちでした。そこで彼らの要求を満たすべく、妻のキャスリーンと私は週に一度私たちの家で特別な家庭の夕べを開くことにしました。毎週日曜日の夜は60人から70人の若者たちで居間が一杯になりました。彼らの多くは生活にしっかりした基盤がなく、欲求不満に陥っていました。彼らは私たちの子供と遊び、互いに話し、少し安らいだ気持ちになっていたようです。私たちはリフレッシュメントを準備し、一緒に歌ったりゲームをしたり、時には真剣に討論したりしまし

た。この家庭の夕べではただ、自分が価値のある人物であること、また自分には安らぎを得る場所があることを彼らに知って欲しかっただけなのです。

このような家庭の夕べを始めて数カ月が過ぎた頃、私と妻は少し変わった活動を試みることにしました。ある晩私たちはこの若い友人たちに、生活の中で家庭の夕べの持つ意味を表現してくれるように頼みました。私たちはクレヨン、紙、はさみ、鉛筆、粘土、おもちゃ、その他いろんなものを準備して、自分を表現するのに一番適当だと思うものを選んでもらうようにしました。それから約45分間、彼らの好きなように取り組んでもらったのです。

それから後は、笑いの渦が起こったり、楽しかった思い出にふけったり、^ま真面目に



それぞれの批評をしたりして、とても楽しい夜を過ごしました。みんなが順番に詩を読んだり、絵を見せたり、スケッチを描いたりしました。気の張らない仲間を聞き手にしてスピーチをするだけの人もいました。

しかし中にとても変わった若者がふたりいました。ひとりは大声でばか騒ぎを始める、かなりの鼻つまみ者でした。彼は数学の専門用語を使った、とても神経質な感じのする詩を書きました。彼以外にその詩を理解できる人はいませんでしたが、私たちは彼に自分を自由に表現できる場を与え、そうするように仕向けました。その結果彼は安心し、心を許すようになりました。何カ月も後になって知ったのですが、その晩のことは彼に自殺をやめさせるきっかけとなったらしいのです。彼はそれまでひどく落ち込んでいましたが、あの晩のことが初めて人生に価値を見いだす経験となったのです。彼が「ありがとう」を言うためにわざわざトルコから長距離電話をかけてきた時、私たちは彼の気持ちに気づきました。ともかく、私たちの払った犠牲は報いを受けたのです。

もうひとりの青年ジョンはとにかく無口でした。家庭の夕べにはやって来るのですが、いつも隅に座ったきり一言もしゃべりませんでした。だれかが話しかけても、答えようともしませんでした。またキャスリーンと私が週日に家に招待しても、来たためしがありませんでした。私たちはジョンに自分自身を表現させ、自分の価値を分からせようとあらゆる手を尽くしました。けれども彼は応えませんでした。ジョンは他の人々とのかわりを完全に断ち切ろうという様子だったので、私たちは特に気になっていたのです。けれども、どうやってジョン

に近づいたらよいか見当が付きませんでした。また人の価値が社交性の有無によって決まるのではないことや、彼が世に示せるのは空軍で得た地位だけではないことを彼にどのように理解させるべきかまったく分かりませんでした。しかしこの特別な家庭の夕べの活動で、ジョンはあまり心配する必要がないことを私たちに示してくれたのです。

ジョンは粘土を取り、居間の隅っこへ行きました。彼はその家庭の夕べの間、まるで隠れるようにしてひとり黙々と、粘土で何かこしらえていました。そして、他の人たちが自分の作品を発表している間、時々笑顔も見せていたのです。彼は普段感情を絶対に表に出さず、いつもおし黙ったままでした。そこで、私たちはみんなの発表が終わった後で、ジョンに自分の作品を発表するように一生懸命頼みました。

喜ばしい驚きが私たちを訪れました。彼は立ち上がり、こう言ったのです。「聖書には迷い出た羊のたとえ話があります。話には、羊飼いがこの迷い出た羊のことをとても心配していたから、他の羊を残しておいて、捜しに行ったとあります。この迷い出た羊は僕のようなものだと思います。そして皆さんが僕を捜してくれたんです。僕はこの小さな粘土の羊を感謝の印として皆さんに差し上げたいと思います。」

それから彼は座りました。だれも一言も口をききませんでした。その場に涙を浮かべずにいられた人があったかどうかは私の疑うところです。

天のお父様の羊を養うこと以上に素晴らしい一日の過ごし方があるでしょうか。だからほのかな思い出のよすがとして、私はジョンの羊をいつも机の上に置いておくのです。



私
た
ち
の
結
婚
を
救
つ
た
原
則

ジュディス・ロング



「僕 たち、うまくやっていけるんだろ
うかね。」こう夫が切り出しました。

結婚7カ月、妊娠半年の私は、ベッドの上
にうずくまっていた。涙がほおを伝わり、夜着
をぬらしていました。一体なんと答えたらよいの
でしょう。

非教会員のジムは合衆国海軍駆逐艦に乗船する
中尉で、1週間おきにカリフォルニア、サンディエ
ゴ港から出帆していました。ジムは仕事を愛し、仲
間を愛し、愛する妻の待つ我が家に帰ってくるの
を何よりも楽しみにしていました。ところが私は惨
めな有様でした。1週間おきに孤独を味わい、見
ず知らずの町には友達も家族もなく、その上、当
時不活発だった私には教会との接触はまったくあ
りませんでした。私はたびたび陰うつな気分にか
陥っていました。おまけに、つわりや吐き気、日増
しに大きくなってゆくお腹はそうした私の心にま
すます拍車をかけるばかりで、私は自分をどうす
ることもできませんでした。

海上任務の週が明けると、いつでものんきなジ
ムは、満ち足りて満面喜悅の妻を迎えてくれると
ばかり期待して家に帰ってくるのが常でした。と
ころが幾日も幾日も独り留守居を務めた後の私
にはとても明るく振る舞うことはできなかつたの
です。私たちの小さな借家はあんたんとした気分
に包まれていました。私は様々な猜疑心おぼしめしに悩ま
されていました。私はジムを本当に愛しているのか
しら。彼は私が何を必要としているか、どうい
う気持ちでいるのか分からないみたいだわ。これ
が世間で言う結婚の幸福というものなのかしら—
等々。私たちふたりは以前にもこのことについて
話し合おうとしてはきたのですが、そのたびに表
面的な食い違いの解決だけに終始してし

まい、問題の核心にまで触れたことは一度もありませんでした。

ふたりはベッドの上に向かい合って腰を下ろしていました。私たちの結婚生活は深刻な危機を迎えていたのです。果たして何をすればいいのか。離婚……、ふとその言葉が脳裏をかすめました。それがふたりの望んでいることなのでしょう。そこには致命的で、永久に取り返しつかないような響きがあって、ふたりとも思わずぞっと尻込みせずにはいられません。とはいえ一体この事態、どう変えられるのでしょうか。

双方とも口をつぐんだまま、一心に考え込んでいました。ややあってからジムが顔を上げ、口を開きました。「ジュディス。僕たちの問題は利己心のせいじゃないかと思うんだ。どうだろう、真剣に努力してある実験をしてみる気はないかい。これから30日間、僕は君と君の必要としていることだけを考えるから、君は僕と僕の必要としていることだけを考える。もしその期間が過

ぎる頃になってもふたりの結婚が今と変わらなければ、その時は……、その時はまた別の方法を考えよう。」

私はうなずいてみせました。幸福になりたかったのです。いいえ、幸福に飢えてさえました。

「だけど、気を付けなければいけないことがひとつある。」ジムの警告です。「自分のして欲しいことを基準に考えて相手の行動を頭から決めてかからないとき。ふたりとも、望んでいることが受け取ることと見合なれば、がっかりしてしまうだろう。だから、お互いに相手のために自分に何ができるのか、そのことだけを考えるようにしなければいけない。」

翌日の朝、はれぼったい目をして吐き気と戦いながら、私はベッドからそっと抜け出しました。ジムはボリュームのある温かい朝食が大好きなのです。私としては朝食は軽く済ませてまたベッドにもぐり込みたかったのですが、それでもやはり夫のために豪華な食事を準備しました。ジムはにお



いをかぎつけて、顔をほころばせながら台所に入ってきました。ああ、これで食後の睡眠はお預け。私は相変わらず毎朝吐き気と戦いながら、朝食に特別料理を準備しました。

「ねえ、ジュディス。食卓にどんなおいしいご馳走が待っているのかわりたくて朝はとてもしっと寝てなんかいられないよ」とジム。「君は素晴らしい料理の腕があるんだね。僕は満足だよ。」この言葉に励まされて、私の作る朝食は日を追って良くなっていくと同時に、私は増々やる気が湧ってきました。

次の大きな変化は、ジムが長期の任務で海上にあったその週に起きました。私は毎日のように散歩に出かけ、地元で店を開いている食料品屋の主人やその奥さんと親しくなりました。精神を高揚させる書物や音楽に没頭して、沈みがちなあらゆる自己憐憫の思いを心の中から締め出すようにしました。金曜日には十分時間をかけて周到に

準備を整えなければなりません。いよいよ帰宅の時刻になると、楽天主のジムは愛する妻が玄関から駆け出してきて腕の中に飛び込んで来るのを夢に描いていることを私は承知していましたから——駆け出しました。そしてジムを家の中に導き入れ、入念に準備した食卓に彼を着かせたのです。再びロマンスが花を咲かせました。

別のある晩、ジムがこんなことを言いました。「映画でも見に行きたくなったなあ。君はどう？」実のところ、その時私は疲れていて早々に床に就くつもりでいたのです。しかし、あの時の約束を思い出した私は、ためらうことなくさっさと外出用のコートを羽織りました。おそらく一番難しい部分は、「したくないと思うことでもそんな素直は見せずに行なう」ということでしょう。その鍵は態度にあることを私は知りました。ふたりともお互いに相手を喜ばせたいという心からの望みがあれば、そのための苦労など取るに足らないものとなるのです。

もちろん、必ずしも私ひとりで結婚生活のすべてを変えた訳ではありません。ジムも果たすべき自分の分を守りました。彼は、私が最も必要としていることをしてくれました。一番うれしかったのは、ジムが特別私に払ってくれたその心遣いでした。私が手足や背中^の痛む時に今まで5分間だけしてもらっていたマッサージを、1時間もしてくれるようになり、そのお陰で私は体ばかりでなく神経の方もだいぶ休みました。また、今まで以上に会話の時間や休養の機会を増やしてくれました。例えば週末には狭い部屋の中から明るい陽ざしの中へ私を引っぱり出そうと、浜辺へ連れて行ってくれました。ふたり公園でアーチェリーを楽しんだり、ピクニックに出かけたりしたこ



ともありました。それにジムは私が感じたことや経験したことに一層注意深く耳を傾けてくれて、私がいかにたやすく自信をそがれてしまうか気づきました。そして、この約束の期間にこちらの良い点を指摘しては、私の自信を支えてくれたのです。

夫のジムは23歳の若さで、100人もの乗組員を指揮していました。彼らは皆、夫に向かって敬礼し、日々その命令に従って行動しています。時折、ジムは無意識のうちに私にも同じ行動を求めているのではないかと思われたこともありました。でも幸い、30日にわたる約束の期間に夫の態度にあった荒々しい部分は姿を消して、2週間もしないうちに、私は彼の優しさと敬意と愛を感じるようになっていました。

私たちの交わした「堅い」約束というのは、絶えず相手の必要としていることを自分の思いの底に留めておくということでした。つまり、「私は彼（または彼女）のために何ができるだろうか？どのようにして思いやりが示せるだろうか？」と日々自問してみることなのです。また、「こうして

よ！」とか、「私の方はどうなるの？」とか「なぜ彼（または彼女）は……しないのかしら」といった気持ちをふたりの間から文字通り取り除いてしまうことなのです。

私たちの結婚生活で最初に変化したものはお互いの態度でした。そしてその変化は自分を忘れて奉仕するという真実の原則に基づいたものでした。ふたりの行ないは、この原則に対するお互いの理解度や受け入れられる度合に従って変わっていったのです。お互いに相手を喜ばせるために代価を支払っていくうちに真実の愛が育ち始めていたことに気づいたのです。そのために私たちの行なったことと言えば、受けるのではなく与え、無作法をするのではなく親切にし、自分の喜びを求めるのではなく相手を喜ばせたいという望みを持つことだけでした。

ある年輩の友人が、その約1年後に、私たちのこのやり方に彼独特の知恵を付け加えてくれました。「結婚というものを、口の明いた空のつぼだと考えてごらん下さい。親切な行ないのあるたびにひとさじの砂糖が注がれ、逆に利己的な振る舞いのあるた



びに減っていく。年の終わりに、つばは空になっているだろうか。それともあふれ出る程になっているだろうか。結婚生活は苦しいものとなっているだろうか。それとも魅力的なものとなっているだろうか。」

利己的でない、思いやりに満ちた態度を身につけるのは容易なことではありませんでした。それどころか、絶えず努力していかなければならないのです。結婚生活を脅かすような徴候はすぐに見分けることができました。それから後も私たちは、時折もう一度あの堅い約束を思い起こして、ふたりの行ないを変えていかねばならないこともありました。

結婚して6年目に、私は福音が真実であることを確信するに至りました。それに夫のジムが教会の教えを聞き、宣教師の訪問を許すようになりました。それには、お互いに相手に見え、相手を喜ばせようとした以前のふたりの努力が少なからぬ動機の一部となっていることは否めません。私は再び教会に活発に通うようになり、ジムもバプテスマを受けました。そして1年後、ふたりは神殿で結び固めを受けました。

続く6年間は飛ぶように過ぎていきました。私たちの結婚生活は福音の原則を基とし、これを応用させながら絶えず向上を続けていきました。

そんなある晩、ジムはインスティテュートから家に帰ってくるなり、教室で覚えてきた幾つかの言葉について私に質問してきました。「この意味を君は知っているかい？」そう言って言葉を並べ挙げるのですが、私にはさっぱり分かりません。

「全然分からないわ。」

私たちは話し合いながら、畏敬^{リスペクト}というか恐ろしくさえ感じたのですが、自分たちが信

仰していると公言していたこの福音を実はよく理解していなかったのではないだろうか、表面的な知識しか得ていなかったのではないだろうか、という疑問が生じてきたのです。

さっそく私たちは集中的な学習に取り掛かりました。信仰、バプテスマ、悔い改め、聖霊について理解するために、もう一度初めに戻って学び直すことにしました。夫婦で一緒に勉強をするというはっきりとした目的を持って週日か週末の休暇を選び、静かな場所へ行きました。ふたりはそこで心を落ち着けて研究し、祈り、熟考しました。

規則に規則を加えると同様、私たちは短^{とじ}時日のうちに急速に成長し、理解力を身につけることができました。この時行なった努力もやはり、利己心を捨て、時にはほかのいろいろな関心をも捨て去って、互いにそろって進歩成長し、自分の学び取ったものを家族と共に分かち合うことでした。故意に歩調を乱せば、そのために家族全員の進歩が遅れてしまうのですから、夫婦どちらもそんな責めを受けたくありませんでした。

現在、福音の勉強と奉仕は、相変わらず我が家の活動の中心であり、かけがえのない特権でもあります。振り返ってみると、私たちの最初の成功は今では小さなものに見えます。しかし、あの冬の夜更けに、絶望し、何かを求めていた新婚夫婦に注がれた一条の光に、私たちはこれからも感謝し続けるでしょう。福音は、「利己心を捨てた奉仕」というものが永遠に続く結婚のために天父が定めたもうた原則の本質を成すことを、もう一度しっかりと私たちの心に刻みつけてくれたのです。

両親を 敬いなさい

七十人第一委員会会員

ヒュー・W・ピノック

私が17歳の時でした。当然のことなのですが、私が悪いことをしたことで、父は私を非難し始めたのです。思いがけない父の叱責に、私は気も動転して父の方を向き、このようなことを言いました。「パパ、やめてよ、そんなこと言うの。こんなことしたの十代になって初めてなんだから。」

すると父は、実にユーモアたっぷりにこう言ったのです。「ヒュー、私だって親にな

って初めてのことだよ。」

父は気づかなかったかもしれませんが、この経験は私にとって大きな教訓となりました。十代の青年として、私は自分の親に対して責任を持っていましたし、親が自分のことを忍耐し理解もしてくれるものと思っていたので、自分も親のことを忍耐しなければならなかったのです。

その生涯を通して、イエス・キリストは

ご自身と天父との関係に触れられました。弟子たちにこう教えておられます。「わたし为天から下ってきたのは、自分のこのころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。」(ヨハネ6:38) また、交わりを持たれた人々に対してよくこのように注意されました。「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」(出エジプト20:12) この戒めは、歴史から見て宗教が形成された頃から存在しました。救い主は古代イスラエルの民に語られただけでなく、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」(マタイ19:19)と尋ねてきた人にも、同じことを言っておられます。救い主が繰り返し言われた戒めの中に、このような言葉があります。「父と母とを敬え」。また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ。』(マタイ19:19)どうか戒めを友として下さい。それも、ひとつの権利としてそうして下さい。

救い主が私たちにこの世の父と母を敬うように教えられたのは、私たちが地上の両親から受けるものに主として依存するようになることを御存じだったからです。救い主はまた、親も含めて私たちすべての者に、「幼な子のようにになりなさい」(マタイ18:3参照)、「天国はこのような者の国である」(マタイ19:14)と教えられました。救い主は両親に対して、完全な清らかさと純真さを育むように、そして偽りやずさのまったくないこと、その他だれもが赤ん坊と

してこの世に生まれた時には持っているキリスト的な徳を、一層高めるように期待しておられるのだと思います。

人の属性の多くは直接親から伝わります。父親と母親が、イエス・キリストの福音に忠実である強みを教え、それを誠実に実践するならば、子供たちは普通その教えを受け入れ、教えに従うことによって親の模範に应じるものなのです。

私の若い友人に、父親が監督をしている人がいました。その友人は、自分の父親が監督でなかったら、聖餐会でも家族一緒に座れるし、家で家族と多々多くの時間を過ごせるのにとよくこぼしていました。しかし、時を経るにつれて、友人はその考えを変えていきました。彼は父親を尊敬するようになったのです。それは、父親が監督としての責任をよく果たしたことによって、家族がいろいろな点で実に多くのものを学び、また貴重な靈的経験を共にすることができたからです。父親が監督でなくても多々多くの時間家族と共に過ごしていたら、このような経験は得られなかったことでしょう。その息子は父親と父親の教会の召しを尊んだのです。その素晴らしい父親の思い出を尊ぶように。

親も時々間違ったことをすることがあります。それを口実にして、「どうして悪いことをしている親を敬うことができるのか」と言っている人はいないでしょうか。もちろんこの答えは救い主の言葉の中にあります。救い主はこう言われました。「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍

するまでにしなさい。」(マタイ18:22) 私たちにもこれと同じ責任があります。自分が親や他の人々に赦しを期待するように、親の間違ひも赦さなければなりません。

ある十代の私の友人が、父親と激しい言い争いをしました。そして、取り乱した父親は部屋を出て、2階に通じる階段を昇っている途中、心臓発作を起こして亡くなってしまったのです。私の友人は、父親を敬ってあげればよかった、あんな怒りに触れるような物の言い方をしなければよかったと、何度も悔やんでいました。

高校からユタ大学在学中にかけて、私はバーバラ・ベンソンほか、エズラ・タフト・ベンソン会長ご夫妻の令息、令嬢の方々と知り合う機会がありました。バーバラやボニー、マーク、ベスと話していて、私はベンソン家の子供たちが両親に深い尊敬の念を抱いていることに感銘を受けました。ある時バーバラはこう言いました。「私の両親を敬うのはとっても簡単よ。なぜって父も母も私たちをとても尊敬してくれているのですもの。」

数カ月前になりますが、非常に優れたプレーヤーのひとりと話をしました。そのたくましい青年はたった今、フットボールの試合できわだって優れたプレーを見せてくれたばかりでした。後で彼になぜあのようなプレーができるのか尋ねたところ、こんな答えが返ってきました。「もちろん、両親が見ているからですよ。」彼は、フットボールの試合で特別な努力を払うことによって親を尊んでいたのです。

しばらく前、ある両親と話し合っていたところ、母親が、うちの子供たちは帰宅が

夜遅くても心配しないと仰いました。その理由を尋ねると、彼女はこう答えてくれました。「うちの子供たちは遅くなる時は電話を入れてくれるんです。ですからいつも子供たちがどこにいて、何をしているか分かるんですよ。」彼女の子供たちも彼女を敬っていたのです。

非常に難しい決断を求められた女子大学生がいました。彼女は両親の気持ちをことのほか気にする人だったので、両親に助言を求めました。そして、両親の意見を注意して聞いた後、彼女はその後の人生に影響を及ぼすような当を得た決断を下したということです。彼女もまた両親を敬ったことになります。

「敬う」という言葉は、優しい言葉であり、特別な尊敬を払う、感謝や賛辞を捧げるという意味です。また、辛抱強く思いやりをもって与えられた教えに応えるという意味でもあります。子供の私たちが父親と母親を敬うならば、家族の一人一人がもっと幸福になれるのではないのでしょうか。アブラハム・リンカーンのよく引用される言葉に、「私が現在あるのは、あるいはかくありたいと願うのはすべて、天使のような母のお陰である」という言葉がありますが、教会の十代の若者たちが全員心からこのように言うことができたらと思います。皆さんが現在あるのは、あるいはこうありたいと思うのは、皆さんの両親や皆さんの親代わりをして下さっている人々の忍耐と、励ましの言葉と、行動に負うところが多いのです。

皆さんのために思って下さるすべてのことに感謝することによって、どうか毎日お父さん、お母さんを敬って下さい。

「聖物」だって

いじじゃないか

七十人第一定員会会員
ウィリアム・グラント・バンガーター

ペテロの第一の手紙を開くと、私たちがどんな人物になるべきかを説いたひとつの偉大な聖句が目に入ります。私には、この聖句が特に若人の皆さんのことを言っているのだと思えてなりません。こうあります。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王国の神権者、聖なる国民、特異な民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」(Iペテロ2:9)

私には、末日聖徒の若人の皆さんが全員、自分に何が求められているのかを理解しておられるかどうか分かりません。しかし、私たちは選ばれた種族です。福音が回復されたことを知り、しかもイエス・キリストの福音の原則に厳密に従った生活をすると、世から選び抜かれたのです。そして祝福を受けて、福音の儀式によりこの地上で他の人と結び固められる時、私たちは王国の神権者となるのです。

「われ汝を大いなる国民となし、汝を限

りなく恵み、汝の名をすべての国民の中に大いならしめ、汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて、汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。」(アブラハム2:9)

私たちは、私たちに授けられたこの祝福により、聖なる国民となります。今までのことを振り返ってみて下さい。まず私たちは生まれてすぐ、長老(父親)から命名の儀式を受けました。そして後に教会でバプテスマと確認の儀式を受け、それから適切な時期に、自分の進むべき道を示してくれる祝福師の祝福も受けました。若い兄弟たちはアロン神権を受け、そして後にはより高い神権であるメルケゼデク神権を受けることとなります。女性の皆さんは、家庭やワード部において、また結婚生活や神殿の儀式を通して、神権の祝福を受けます。また、すべての教会員は、父親からの祝福や癒しの儀式などを通して、特別な祝福を受けることができます。このようにして、私たちは「聖なる国民」となるのです。

ペテロの説明で最後にくるのが、特異な民という言葉です。この言葉が「変わっている」という意味だと言ったら、理解できない人も出てくるでしょう。「変わっている」という言葉は、必ずしも良い意味では使われませんが、要は、他の人とは違っているということなのです。人がよく私たちのことを「堅物」と言うのはそのためです。

でも、「堅物」も悪いとばかりは言えません。私は何度もそのことを経験しました。第二次世界大戦の時、私は空軍にいました。そして戦地に派遣されなかった4年間は仲間と寝食を共にしましたが、その仲間で教会員はほとんどいませんでした。私はその間飛行機の操縦法を教わり、やがては教官になりましたが、まったく楽しいの一語に尽きる経験でした。仲間の若い連中はみんないい人で、互いに冗談を言い合ったりする時など、末日聖徒であることに引け目を感じたことは一度もありませんでした。事実、生活態度こそ違え、彼らは私のことを尊敬してくれていました。

私が兵役についたのは伝道から帰ってからのことです。仲間は私が伝道に出たことを知っていました。ですから、彼らにとって私は「牧師」でした。テントでテネシー出身の若い兵士と隣合わせで寝ていた時のことです。この青年はいつも不思議そうなまなざしで私を見ていました。何か悩みでもあるのかと尋ねると、彼はこう答えました。「信じられないんです。子供の頃から、

牧師様はとても偉い方でまともに口をきくこともできないと思っていました。でも、今こうして同じテントで隣合わせに寝ているんですからね。」

さて私の仲間は、私たち末日聖徒が良いと思わないことをしていました。タバコを吸ったり酒を飲んだり、また神を冒瀆したり不道徳な行ないをしたりです。彼らには、神が自分に何を期待しているかなどということはどうでもよいことだったのです。しかし緊迫した状況下に置かれると、彼らの態度は一変しました。あるひとりの若い兵士のことですが、彼は、かつて宣教師であった私の生活態度に対して、特にとりたてて心を動かされたというふうではありませんでした。その彼が飛行予備審査を受けることになったのです。この予備審査は、いわゆる「ふるい分け」の審査で、これに落ちれば合衆国空軍で操縦かんを握ることは不可能になります。彼は沈痛な面持ちで、目に涙をためながらこう言いました。「ビル、お願いだから僕のために祈ってくれない？ ぜひそうして欲しいんだ。」

またある日控え室で、私たち5人が教官から説明を受けていた時のことです。その時教官はタバコを吸っていたのですが、黒板を使って説明をするのにそのタバコが邪魔になり、座っていた私に手渡しました。火のついたタバコを手にする「特権」に浴したのは、それが最初でした。

黒板を使った説明を終えると、教官は私

の手からタバコを取ってこう言いました。
「バンガーター君、タバコを持ってもらってすまなかった。君はタバコは吸わなかったんだね。」

私が「ええ」と答えると、教官はこう聞いてきました。「酒も飲まないのだろう。」

「ええ、飲みません。」

彼はまた尋ねました。「お茶は飲むのかね。」「いいえ。」そう答えると今度はコーヒーは飲むかと尋ねました。そして、飲まないという私の返事を聞くと、彼はほかの4人の方を向いてこう言ったのです。「諸君、これが知恵の言葉と呼ばれるものだ。これを守ればだれでも皆もっと健康になれる。」この経験を通して私がどれほど心を高揚されたか、お分かりでしょう。

飛行中隊の司令官と同乗した時のことです。その時、私は23歳で司令官は40歳位でした。彼は言葉も行ないも実に立派な人でした。ところが、着陸して駐機場に飛行機を移動させる途中で、別の飛行機がそばを通り過ぎていきました。司令官にはそのやり方が気に入らなかつたらしく、相手のパイロットに目をやると、吐き捨てるようにこう言いました。「ありゃ、一体何を考えて操縦してるんだ。」そしてのろいの言葉が彼の口からもれました。ところが飛行機を駐めて外に出ると、彼はこう言ったのです。「バンガーター君、あのような言葉を口に出してすまなかった。同乗者が君だということを忘れていたよ。」

もちろん私は、人から特別な目で見られていることは分かっていました。ある人は得体の知れない奴だと思っていたことでしょう。しかし付き合いのあった人は、私の生き方に対してたびたび敬意を表してくれました。ですから、神殿のガーメントを脱いだり、末日聖徒であることを弁解したりして標準を下げるようなことは、まったく不要でした。

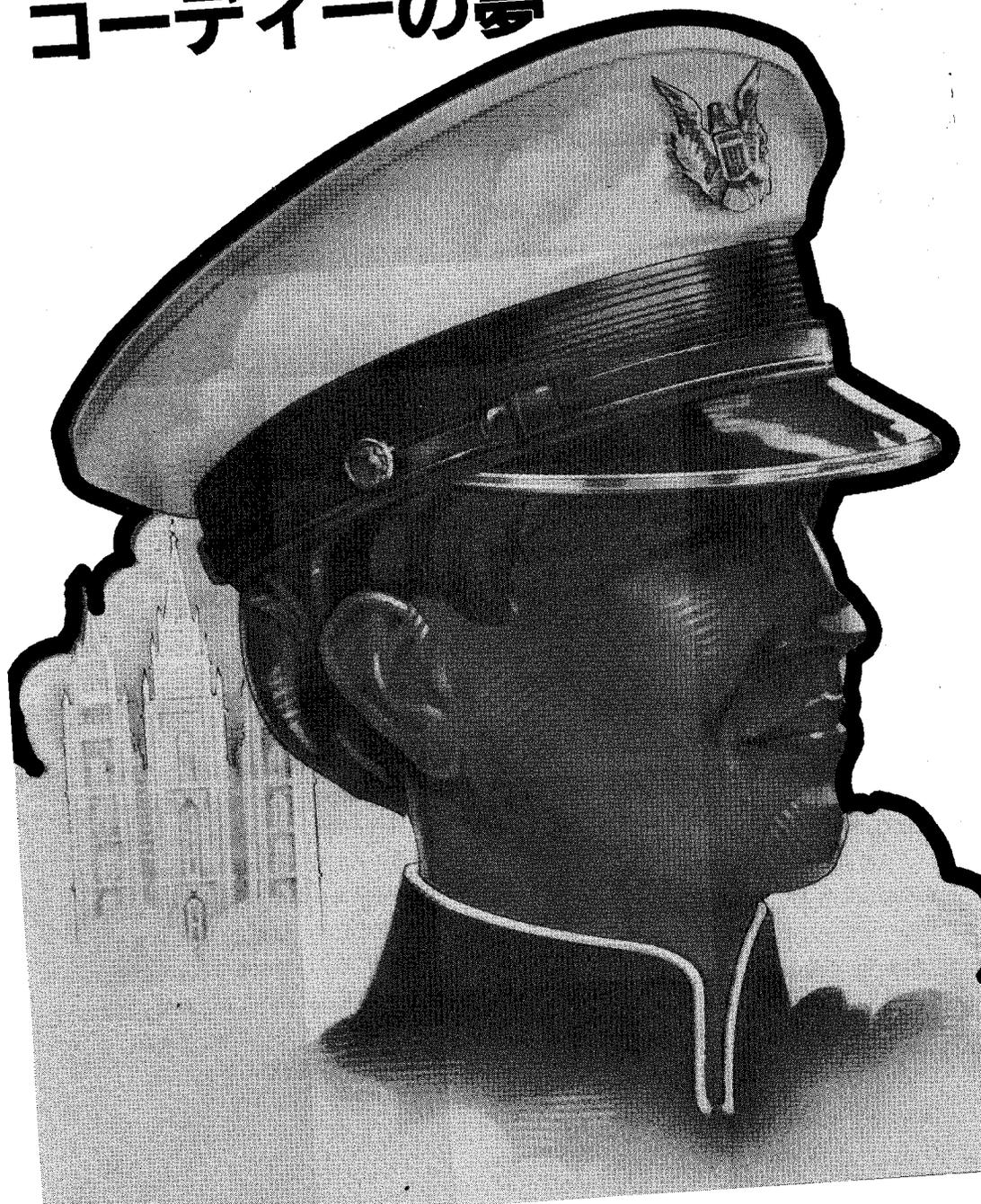
訓練の間、送別会その他で同期生とパーティーを開いたことが一度ならずありました。もちろんアルコールがふんだんに出されたわけですが、同期生が何人かパーティーの前に私のところに来て、酔っ払うと正体がわからなくなるから、帰りは車を代わって運転してくれるようにと頼んできました。

これは正直に申し上げることですが、教会員以外の人で、私に教会の標準を捨てるように誘惑してきた人はひとりもいません。そういうことをしたのは、かえって教会員で教会の戒めを守っていない人たちでした。

私は真理と義の原則を守ることが祝福につながることを知っています。自分自身の人格と徳に重きをおく人は、選ばれた種族となる榮譽を受け、特異でしかも高貴な民として知られるようになるでしょう。私は、まわりにいる若人の皆さんが「堅物」であることを願っています。「堅物」であればこそ堅固な土台が築けるからです。

コーディネーターの夢

リチャード・M・ロムニー



コーディー・カーが宇宙飛行士への夢を心に描いたのは、わずか4歳の頃です。什分の一を入れる貯金箱は宇宙船の形をしていて、お金を入れると電気がつくしかけになっていました。ちょうどロケットが発射する時のようです。学校に行くようになって、友達にはコーディーがそんな途方もない夢を抱いていることを馬鹿にしましたが、コーディーは真剣でした。当時は宇宙飛行計画がまだ始まったばかりの頃で、ロケットの打ち上げがあると、一部始終もらずまいとしてラジオに釘づけになるほどでした。

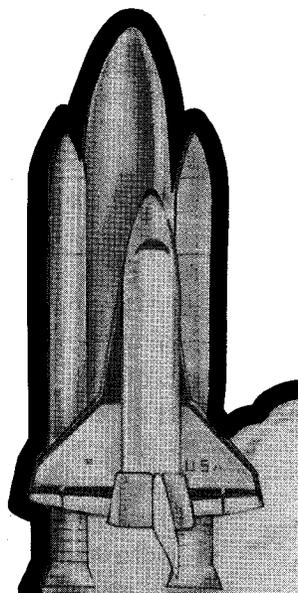
当然のことですが、コーディーは天文学にも関心を抱くようになりました。クリスマスプレゼントに望遠鏡をもらうと、朝の3時か4時に起きて、星を眺めていました。「夜の空は本当にきれいです。宇宙はすべて神が創造されたものですが、未知の部分がたくさんあります。私は、どこか未開の地があったら探検したいと思うのですが、残っているところと言ったら宇宙だけなんです。宇宙に行くには宇宙飛行士になるしかないでしょう。」彼はそう語りました。

コーディーは、科学や電子工学のクラスを取れるだけ取りました。「私は電子工学は宇宙探検に別に関係ないと思っていたのですが、父の勧めでクラスを取ることにしました。実におもしろい学問ですね。」彼は州の電子工学コンテストで優勝しました。

宇宙飛行士になる目標のひとつに、空軍士官候補生になることができました。高校に進学すると、彼は両親やカウンセラーと

そのことについて相談し、またよく祈りました。コーディーには人生を貫く目標が3つありました。まず、天父が授けたもうた戒めをすべて守ること、第2にフルタイムの伝道に出ること、そして最後に神殿で結婚することです。2番目の目標について、彼はこう語っています。「伝道に出ることについてはしょっちゅう話し合っていたので、もう出るのが当然のようでした。」

この3つの目標について、コーディーはさらにこう語っています。「毎晩寝る前に父と母がベッドのところに来て、私たち一人一人に『人生で何を徳たいか、何をしたいか、どんな人物になりたいか』と聞くんです。この目標設定の機会には、私の人生の



歩みを正しい方向に導く上でどんなに役立ったか分かりません。私の答えは、いつも前に述べた3つの目標でした。もちろん宇宙飛行士になる夢について話したこともありましたが、それでも3つの目標は必ず入っていました。そして、その目標を達成するために何をしなければならないか、また問題点は何かなども話し合いました。」

しかし、目標の中にどうしても対立するものがありました。伝道に出るとなると、士官学校を1年で退学しなければなりません。伝道のための休学などというものはないからです。そして、もし退学したら、復学は不可能でしょう。全部初めからやり直せばいいわけですが、かなりの狭き門ですから、チャンスはほとんどありません。

コーディネーはとにかく準備を続けました。毎晩6～8キロ走って体力作りをし、大学の試験も受けました。また面接を受けて、幹部候補生としての適性評価の機会も得ました。

士官学校での最初の年は、伝道の召しをただ待つだけでした。その時のことをこう述懐しています。「つらかったですね。4カ月程過ぎた頃、これが自分が望んだことなのだろうかと思ひましてね。でも、聖霊を通して得た答えが心に浮かんできました。自分はキンボール大管長の指示通りのことを、適切な時期に適切な順序で行なっている。そう感じました。そしてよく祈って、計画をそのまま遂行しようと思決したんです。」

こうして1年が過ぎ、コーディネーは伝道への決意を固めていきました。士官学校で

1年間血のにじむような努力をして、しかもそれを捨ててしまわなければならない。それはどれだけ勇気のいることでしょうか。それに、学校をやめるということは、子供の頃からの夢だった宇宙飛行士への道をも閉ざしてしまうことになるのです。「でも私はもう8年も前からやめると決心していました。苦しいことは苦しかったですが、迷いはなかったですね。」

3月の休みの時、コーディネーは監督とステーク部長から伝道の面接を受けました。そしてその年の夏の終わり、学校での特別訓練を終えた後で、退学届けを出しました。退学希望者はすべて面接を受けることになっていて、コーディネーは何人ものカウンセラーや士官と会って話をしました。その時の様子をこう語っています。「初めは皆、真意をはかりかねるといった様子でした。でも退学の本当の理由が分かると、態度が一変しました。彼ら自身の末日聖徒の知人の名前を挙げてその生活態度をほめ、私が伝道が終わったら学校に戻りたいと言うと、よいことだと言ってくれました。驚きでした。」コーディネーの退学届けには、伝道とはどういうもので、なぜ伝道に出ることを希望するかが詳しく記されていました。

退学のための書類にサインをすることになっていたある士官は、彼にこう尋ねました。「こういった感じのものは今まで読んだことがないな。君は本当にこれを信じているのかね。」「その通りです。」コーディネーは答えました。

コーディネーはこう説明しています。「多くの人は理解できませんね。でも説明すると

受け入れてくれます。彼にとってみれば今まで考えてもみなかったことなのですからね。」そして5月、コーディーはスイス・チューリッヒ伝道部への召しを受け、8月に宣教師訓練センターに入りました。集中学習はお手のものです。それに加えて、彼は従順になることを学びました。「時間を上手に使うように気をつけました。犠牲を払っての伝道ですからね。」

彼も、初めのうちは復学できないのではないかという思いが何度も頭をかすめました。しかし、やがてそれも消え、すべてを主にゆだねるようになりました。それに伝道それ自体、いろいろと大変です。「最初の6、7カ月間は義務感ですべてをこなしていたという感じですね。その業が大切だということは分かっていたのですが、心から取り組むという状態ではありませんでした。ところが、ここで学校での経験が役に立ちました。学校ではいつも難しいことばかりさせられていましたから、困難な状況には慣れていたんですね。一生懸命努力し、毎日祈りを続けていくうちに、伝道が義務から喜びへと変わっていきました。こうしてある週突然目からウロコが取れたように目の前が開けて心が穏やかになり、心から主のために働きたいという望みがわき上がってきました。そして最終的には、たとえ士官学校に復学できなくとも、伝道は自分にとって十分価値のあるものだったんだと思うようになったのです。」

それからしばらくして、候補生でコーディーと同じように退学して伝道に出たテッド・パーソンズが復学を認められたとの知

らせが、コーディーのもとに届きました。コーディーにも復学の可能性が出てきたわけです。

伝道を終えて、コーディーは合衆国軍委任官試験を受けました。「伝道部長が祝福をしてくれました。伝道を立派に終えた今、必要なことをすべて行なえるように主が助けて下さるという祝福でした。」

祝福を受けた少し後で、コーディーは自転車に乗っていてほかの自転車と正面衝突し、ハンドルレバーで鼻を強打しました。その時のことをこう語っています。「士官学校の入学資格は厳格ですからね。あのような勢いの打撲ですと、普通はパイロットの試験にパスできなくなるんです。目や額はもちろんですが、歯を打っていてもだめだったでしょうね。」コーディーは主のみ守りがあったことを確信しています。

試験の結果は上々でした。最初に受けた時よりも点数がいいのです。試験の内容が前回よりも難しかったので、その分コーディーは優位に立ちました。

「とにかくやることはすべてやりました。自分でしなければならないことはすべてしたわけです。あとは主にお任せするだけでした。」

コーディーの信仰は報われました。スイスの伝道部を離れて2週間後、そして退学してから2年後に、コーディーは再び同じ合衆国空軍士官学校に入学することができたのです。後の宇宙飛行士への夢は着々と実現しつつあります。戒めを守り、伝道に出、神殿で結婚するという3つの目標と共に。

奉仕の 喜びを味わう

小柄なベトナム人の女性が、スーパーマーケットの冷凍食品用の陳列ケースから、コチコチの七面鳥をやつこのことしげと見詰め、やがて歯をむきだしてにやアメリカ人の少女の方を振り返つてこず尋ねました。「チキン？」ふたりはくすくす笑い出しました。そして簡単な英語を使って、その大きな鳥が超特大のチキンではなく、七面鳥であることを説明しようとした。シティーのリバーサイドステーションの会員です。このステーションでは奉仕活動の一環として、ベトナム人の家族のお世話をしています。そしてふたりに与えられた責任のひとつが、この家族をアメリカのスーパーマーケットへ案内することでした。センタ



ー・ファーストワード部のローリー・スピ
ーリーはこう語っています。「初めてマー
ケットへ案内した時のことを、今でもはっ
きり覚えてます。ふたりで笑ってばかりい
たんですよ。」

難民家族の世話にあたって、多くの若い
女性が協力しました。家族のために適当な
住居を捜し、衣類や寝具を集め、子供たち
の入学手続きをし、小さな家族を街へ案内
しました。

「言葉は通じなくても、感謝の気持ちが
伝わってきました」とローリーは話してい
ます。

リバーサイドステーク部の少女たちは、
奉仕の喜びを味わいました。しかもそれば
かりでなく、奉仕活動として始めたことが、
友達同士の思いやりや助け合いという絆を
生みだしたのです。

この喜びにあふれる奉仕は、ソルトレー
ク・バレーの12のステーク部において、い
ろいろな形で繰り返し行なわれました。そ
してその成果が、若い女性の創設112周年
を祝う席上で、歴代の若い女性中央管理役
員に紹介されました。そうした奉仕活動は、
心身に障害のある子供の世話から地域社会
の老人の世話にまで及んでいました。

ソルトレーク・イースト・ミルククリーク
第4ワード部の少女たちは、キャンディー
の瓶を使った奉仕活動を計画しました。
毎週その瓶の中に、1週間に行なった奉仕
の数だけキャンディーを入れていったので
す。キャンディーを入れるたびに、少女た
ちの心には奉仕の喜びがわき上がってき
ました。やがて瓶が一杯になると、特に選
んだ家族にその瓶をプレゼントしました。

もちろん、一つ一つのキャンディーが愛あ
る行ないを表わしていることを説明しなが
らです。

ソルトレーク・ハラディーステーク部で
は、心身に障害のある青少年のための奉仕
活動を行ないました。第11ワード部のスザ
ンヌ・ハードマンはこう語っています。「若
い女性のクラスを教えるのを手伝いました。
障害を持つ女の子たちが、いつも大喜びで
迎えてくれました。みんな素晴らしい人たち
です。だれでも一緒にいたいと思いますよ。」
ハラディーステーク部の多くの若い女性たち
は、身障者への奉仕をそれからも続けまし
た。

障害を持つ子供のための初等協会では、
子供と一対一で接する必要がありました。
第1ワード部のキャリア・ニールソンは言
いました。「行くのがとても楽しみ。何の
不安もないし、自分が必要とされているこ
とに分かるもの。こちらの方が奉仕を受け
ているような気がしてくるわ。」

地域に住む年老いた会員のために奉仕を
行なっているステーク部も幾つかあります。
ソルトレーク・ハラディー・ノースステ
ーク部では、若い女性が各々ひとりの「おじ
いさん」か「おばあさん」を対象に1年の
間、奉仕しました。交替で送り迎えや、家
の掃除をしました。その上、お年寄りの個
人の歴史をテープレコーダーに録音し、そ
れを筆記し、保存用にタイプしました。そ
して出来上がった記録を、それぞれの子供
さんに配る部数も含めて、差し上げたので
す。

ユタ州オグデンのステーク部で行なわれ
た奉仕活動は、クリスマスの期間にソルト

レーク・シティーのテンプルスクウェアを訪れた何千人もの人々を楽しませただけでなく、イスラエルの多くの子供たちを喜ばせました。若い女性が世界中の国々の民族衣装を付けたぬいぐるみ人形を作り、テンプルスクウェアの南と北にある訪問者センターのクリスマスツリーに、幅の広い赤いリボンで飾ったのです。少女たちは、自分の作る人形の国について調べ、できるだけ実物に近い衣装にしようと努力しました。それから自分の名前と住所を記したメッセージを人形に付けました。

クリスマスが終わると、人形はイスラエルのベツレヘムに送られ、アラブ人の孤児たちにプレゼントされました。眼鏡をかけたイクラスという名前の女の子が、最初の人形を受け取りました。その子は新しい人形を一日中離さず、遊ぶ時も、食べる時も、寝る時も、いつも人形と一緒にでした。

ソルトレーク・キャノンステーク部のドナリン・ルイスは、奉仕をすると何とも言えないよい気持ちになることに気づきました。ワード部のお年寄りのお世話をした後で、ドナリンはこう語りました。「あの方たちのお陰で、自分がかけがえのない存在であると感じています。」また、ソルトレーク・ハラディーステーク部のカーラ・ネルセンは、奉仕のもたらす深遠で尽きることのない影響力を見いだして、次のように言いました。「人を愛するには、まずその人を知る必要があるわ。」

奉仕は、ギブ・アンド・テイクの法則にそぐわないものです。奉仕を受ける人にも、奉仕をする人にも、同じように祝福が与えられるからです。両者に奉仕の喜びがもた

らされるのです。それによって、困っている人々の心は満たされ、与える人々は満足感を覚えるのです。皆さんも奉仕の喜びを味わって下さい。



皆さんのクラスや定員会、ステーク部、地方部の青少年は、あるいは皆さん方自身は、隣人に対してどのような奉仕を行なっているでしょうか。私たちは世界中の青少年が行なっている奉仕活動の中から、幾つか代表的なものを取り上げて紹介していきたいと思います。そこでぜひとも皆さんのご協力をお願いします。地域社会や病院、孤児院における奉仕、恵まれない人々に対する奉仕、そのほかどのようなものであれ、地元のグループが奉仕活動を行なっていたら、どうかその記事をお寄せ下さい。写真もあれば（白黒が望ましい）添えて下さい。特に、奉仕を行なった人と受けた人の感想や反応などを交えた、詳しい記事をお待ちしています。末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部翻訳課（〒106 東京都港区南麻布5-10-30）宛に、1983年6月30日までにお送り下さい。

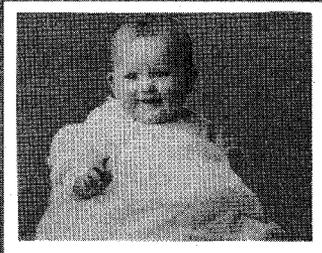
原稿は楷書で書き、それぞれの写真の裏には、返送先の住所と氏名を（読みやすい文字で）書いた紙をテープかのりで留めて下さい。また写真には番号をふり、別紙に各々の写真の番号とその説明書き、および写っている人々の氏名などを一覧表にまとめて下さい。（注意：写真の裏にボールペンや鉛筆で字を書くと、表に写って写真を傷つけることがありますので、ご注意下さい）



ちい

とも

小さなお友だちへ



わたしの

お友だち
へ

ちゅう

かい かい ちょう

中おうふじよきょう会会長
バーバラ・ビー・スミス



あ ^{とき} ^{かあ} ^{じょうび}
る時お母さんが、「おたん生日
のパーティーをしましょう。
お友だちをよびなさいな」といいま
した。わたしは、8人よぶことにし
ました。でも、^{がっこう} ^い
学校に行つてクラス
のお友だちの顔を見ると、みんなよ
びたくなつてしまいました。それで、
お母さんには何もいわずに、みんな
よんでしまいました。パーティーの
^ひ ^{たい}
日は大へんでした。8人どころか44
人も来てしまったのですから。でも、
お母さんはニコニコしながら、^{ちい}
小さなカップケーキをどんどんやいてく
れました。こんなことになったら、
^{かあ}
ふつうのお母さんなら、きつとあわ

ててしまうでしょう。

お母さんは、はたらくことの大切
^{おし} ^{いえ}
さを教えてくれました。わたしの家
では、みんなが何かのせきにんをも
つていて、^{まい} ^{じょうび}
毎しゅう土よう日にする
ことになっていました。それがあわ
つたら、あそびにいつでもいいので
す。みんな、ゆかみがきとか、せん
たくとか、ふきそうじをしました。
お母さんは、わたしたちのすること
なら何でもゲームにしてしまいました。
たとえば、おさらをあらう時
には、おさらをおぼれている人に見立
てて、その人をすくうゲームを考え
たりしました。お母さんと一しょに
いるのは^{たの}
楽しいことでした。どんな
ことでも^{たの} ^{おし}
楽しくやることを教えてく
れたからです。

スミス姉妹は、お母さんや^{たの}
楽しい
^か ^{ひと}
家ぞくのひとたちについて、いろいろ
なことを話してくださいました。ス

ミス姉妹のお父さんは、とこやさん
でした。それから、おばあさんは外
科のおいしゃさんで、おばあさんの
2番目のごしゅ人は、馬ではこぶそ
くたつびんの、はいたつがかりでし
た。そのおじいさんは、わかいころ
インディアンにつかまったことがあ
るそうです。

わたしは小さいころ、時々おばあ
さんの家へとまりにいきました。あ
る日のこと、おばあさんは、おさん
の手つだいをしにいく時に、わたし
と弟をつれていってくれました。そ
の家につくと、おばあさんは、わた
したちに車の中でまっているように
といました。わたしたちは、長い
ことまっていました。そこへ、その
家の子どもたちが一しょにあそぼう
とさそいにきました。わたしたちは
車をおりて、家のうらにわへ走って
いきました。うらのまどからは、お

ばあさんが、生まれたばかりの赤ち
ゃんをおふろに入れているのが見え
ました。その時、とつぜん、おばあ
さんが顔をあげたので、おし合いへ
し合いして中をのぞきこんでいるわ
たしたちと目が合ってしまった。
おばあさんは、大きな声でわらいま
した。車の外へ出たことも、おこり
はしませんでした。きつと、わたし
たちがじっとしてられるわけがな
いとおもっていたのでしょう。

それから、かんしゃさいの白をお
ばあさんの家ですごしたことがあり
ました。その時は、50人もの人が集



トロフィー

ベティー・ルー・メル

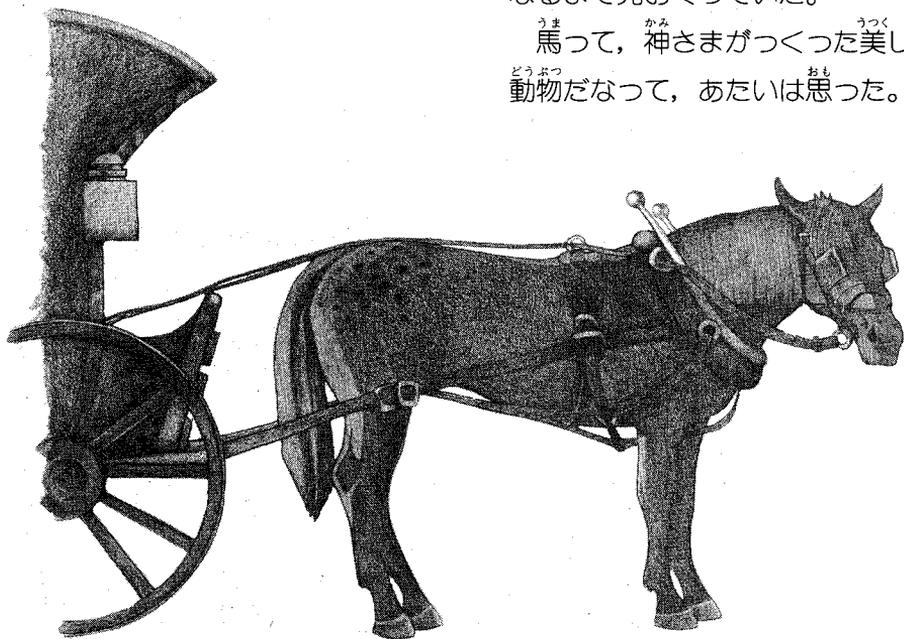
トロフィーがまどの外のほこり
つばいじやり道を歩く音で、
目がさめた。あたいは、とびおきて、
さっとまどをあけた。

「おはよう、おじいちゃん馬のト

ロフィー。」

トロフィーは、牛にゆうはいたつ
のグリーンウェイさんの馬だ。あたい
は、まどにたれさがったブドウの葉
つばをかきわけて、馬車が見えなく
なるまで見おくっていた。

馬って、神さまがつくった美しい
動物だなんて、あたいは思った。



父^{とう}さんが女^{おんな}の子^こにだつて馬^{うま}にのらせてくれたらしいのになあ。でも父^{とう}さんは、女^{おんな}は馬^ば車^{しや}にのるものだ、スカート^{スカート}のすそは、くるぶしより上^{うへ}にあげてはいけないんだつて、がんこ^{かんが}に考^{かんが}えていた。

あたいは、いやいやながら、せんめんきに水^{みず}をくんで、顔^{かお}をあらつた。それからペチコートをはいて、ドレス^{ドレス}を着^きて、下^{した}の部^へ屋^やへおりていった。

朝^{あさ}ごはんがおわると、父^{とう}さんはスティーブンをつれて、入^{いり}口^{ぐち}の方^{ほう}へ歩いていった。それから、あたいの気^き持^もちなんか考^{かんが}えてくれずに、母^{かあ}さんに向^{むか}かっていった。「スティーブンを馬^{うま}のれんしゆうにつれていくよ。そんなに遠^{とほ}くへは行^いかんつもりだが。」

パタンと入^{いり}口^{ぐち}の戸^とがしまると、母^{かあ}さんがあたいの目^め元^{もと}でそつといった。「わかるよ、ジエシカ。でも、馬^{うま}にのるのは女^{おんな}らしくないつて、父^{とう}さんは思^{おも}っているのよ。」

あたいは、やつとのことでなみだをのみこみながらいった。「母^{かあ}さん、あたい、かいだんのそうじをしようか。」

どうして、どうしてスティーブン

が馬^{うま}にのせてもらえるのに、あたいはだめなんだ。不^ふ公^{こう}平^{へい}だ。あたいは、かたい木^きの手^てすり^{すり}がピカピカになるまでみがいた。それから、しゃがみこ^こんで、かいだんをひつかいていた。なみだが、石^{いし}けん水^{みず}の中^{なか}にポタポタおちた。

あたいだつて、スティーブンが楽^{たの}しんでいるのに、もんくなんかいいやしない。でも、スティーブンが馬^{うま}のにおい^{におい}をプン^{ぷん}させて、ニコニコしながら帰^{かえ}つてきた時^{とき}には、ぶつてやりたいと思^{おも}つた。

あたいは、野^の原^{はら}の方^{ほう}へ走^{はし}つていった。そして、気^きがついた時^{とき}にはグリンウェイさんの家^{いえ}の馬^{うま}小^こ屋^やの前^{まえ}に立^たつていた。

「ジエシカ、だれをさがしているんだい。」グリンウェイさんがいった。

「ううん、そうじゃないの。あたい、トロフィーにえさをやつちや、いけないかなあ。」

「いいともさ、わしはおばさんのところへ行^いくが、かまわないから食^たべさせてやつておくれ。」

あたいは、すずしい馬^{うま}小^こ屋^やの中^{なか}に

はい入った。トロフィーは、頭をふりふり、はなを鳴らして、あたいにあいさつした。あたいは、カラス妻をつかんで、トロフィーの口もとへ持っていくてやった。それから、どうしてそんなことをしたのが、自分でもわからないのだけれど、あたいは、さつとスカートをたくし上げると、かべのよこ木にのぼって、トロフィーをよんだ。そして、ふるえる手でトロフィーのたてがみをつかみ、足をふり上げて、せ中にまたがった。ずいぶん高いところへのぼったような気がした。トロフィーは、頭をめぐらしてあたいを見た。それから、馬小屋の戸をおしあけた。あたいは、しっかりと手づなをにぎって、あちへこっちへとトロフィーを歩かせた。かんげきで、むねがいつぱいだった。

それはたしかに、うそをついたのと同じことだった。でも、それからチャンスをさえあれば、あたいは馬小屋へ行った。そして、だれもいない時を見はからってトロフィーにのつた。

それから2週間くらいたって、田

さんと一しょにジャムをびんづめにしていた時のことだった。なやの方から、「ウワーツ」というさけび声が聞こえた。田さんは、あわてふためいて、エプロンで手をふきながら走っていた。あたいも、田さんの後から走った。なやの戸をあけて、中へかけこむと、父さんがゆかにたおれていた。父さんのあしがねじれて、体の下になっていた。田さんは父さんの頭をひざの上にだき上げた。

「おい、医者をよんでくれ、早く。」

田さんは、ふるえる手で自分のどをおさえながらいった。「ジエシカ、行ってちょうだい、おねがい。」

あたいは外にとび出して、声をはりあげてたすけをよんだ。でも、だれも来てくれなかった。あたいは一目さんに、グリーンウェイさんの馬小屋へ走った。グリーンウェイさんの家につくと、ドンドン戸をたたいた。でも、だれも出て来てくれなかった。あたいは、いそいで馬小屋に走っていき、トロフィーのせ中にまたがった。そして、クローラー先生の家へとトロフィーを走らせた。

クローラー先生の家につくと、あ

たいはトロフィーのせ中からすべり
おりて、戸口までよろけながら走っ
ていった。あたいは、ハアハアいい
ながら父さんのことを話した。そし
て、クローラー先生の馬車ときよう
そうしながら、家へひきかえした。

トロフィーを馬小屋へかえしにい
くと、グリーンウェイさんがこわい顔
をして出てきた。「おじょうちゃん、
うちの馬をつれ出したなんてことが
お父さんに知れたら、しかられるよ。」

「おじさん、……あたひ、お医者
さんをよびにいかなくちゃいけな
かったの。父さんがなやでけがをして

……。」あたひは、どもりどもりいつ
た。

「そうだったのかい、ごめんよ、
おじょうちゃん。」グリーンウェイさん
は、あわててこういった。「おいで、
どんなぐあいか見に行こう。」

お医者さんが帰ってしまって、父
さんはベッドでやすんでいた。あた
ひは、そつと部屋の戸をたたいた。

「お入り。」父さんの声がした。

あたひは、父さんの部屋の中に、
そつと入っていった。そして、小
さな声でこういった。「あたひ、父
さんにかくれて、わるいことをした
の。」

父さんは、きびしい目つきであた



いを見た。そして、ベッドのわきをたたきながら、こういった。「来てくれてうれしいよ、ジェシカ。わたしも、お前に話しかかったんだ。」父さんは、大きくりょううでをひろげた。あたいはその中にとびこんで、父さんのかたに顔をうめた。「トロフィーにのって、先生のところへ行ってくれたことは、知っているよ。わたしを、ゆるしてくれるかね。」

あたいはびつくりして、顔を上げて父さんを見た。「ゆるすって、あたいが？ 父さん。」

「がんこな父さんを、ゆるしておくれ。」父さんは、あたいをしっかりとうでにだいて、しずかな声でこういった。父さんのいきが、かみの毛を通して耳に入ってきた。「うちでも馬を買うつもりなんだよ、ジェシカ。スティーブンに買ってやろうと思っていたんだ。それから、馬車もな。だが、わたしが不公平だったよ。馬は、お前とスティーブンとでおつかい。それから、田さんがようぶくを買いにいく時にはついていって、じょう馬ズボンを買うといいよ。」

「じょう馬ズボンを？ 買って

いいの。」あたいは、うれしくなっていた。

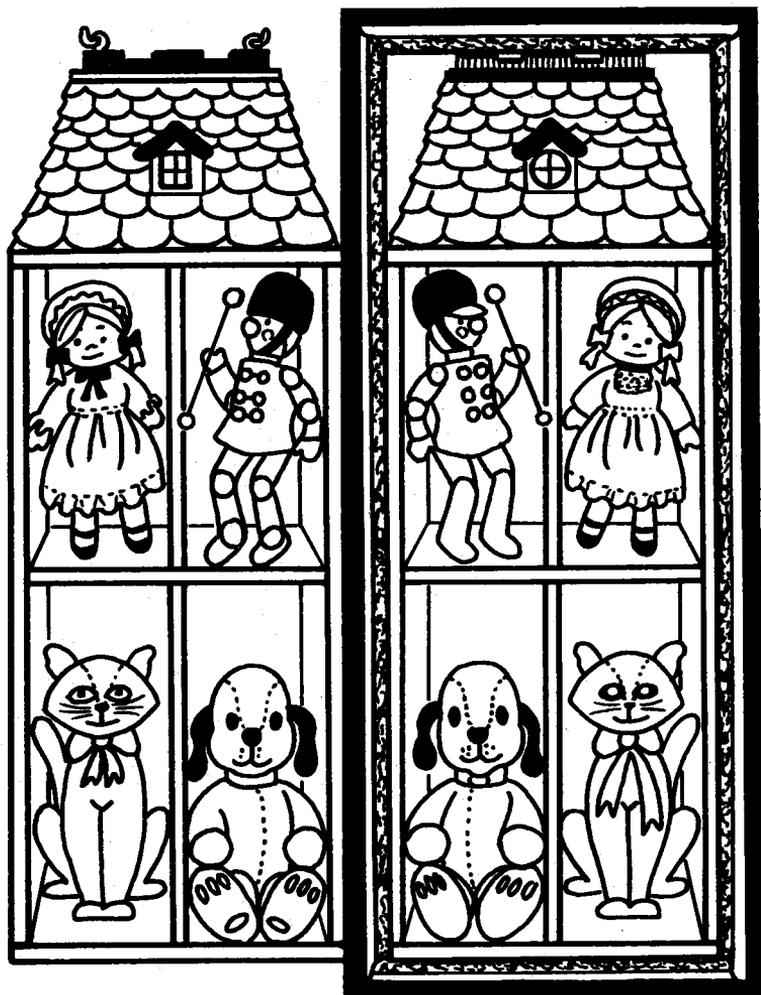
「そうだ、じょう馬ズボンだよ。」父さんの顔だつて、かがやいていた。

父さんは、きびしいけれど、ものわかりのいい、公平な人だ。いつだって、人にしんらいされる人間になれて、教えてくれる。あたいが父さんにかくれて、わるいことをしていたことを話したつて、ちゃんとあたいの話を聞いてくれた。父さんはもうそのことでおこったりはしない。あたいを、ゆるしてくれたんだ。



おもちゃばこ

かがみにうつった
おもちゃばこをよーくみて
まちがいをみつけてね



世界初の人工心臓移植は 霊的経験であった

▶ 執刀責任者であるウィリアム・C・ドブリース博士と移植手術を受けたバーニー・クラーク博士



昨年の暮れ(12月2日)、米ユタ大学医学センターで行なわれた世界初の恒久利用型人工心臓移植手術で、ふたりの教会員が医学史上劇的な役割を演じた。

執刀責任者であるウィリアム・C・ドブリース博士(38歳)と移植手術を受けた元歯科医、バーニー・クラーク博士(61歳)である。

心臓外科医ドブリース博士は7時間におたる手術を終えた後の記者会見で、「手術室にいたすべての人にとって霊的な経験で

した。もしクラーク博士に劇的な処置が取られていなければ、数時間以内に息を引き取っていたでしょう。私たちには、すでにそのための準備ができていました」と語っている。クラーク兄弟の心臓の筋肉は、「まるでティッシュペーパーのように薄かった」のである。

ドブリース博士は、いつも習慣として行なっているように、この大切な手術に際し、手術の数時間前に祈りを捧げ瞑想している。

人体に人工心臓を移植することをFDA（米食品医薬品局）から認可された米国ただひとりの心臓外科医であるドブリース博士は、次のように語っている。

「私はこの仕事を愛し誇りに思っています。これは神から与えられた賜です。さらに技能を高めるためにもっともっと努力しなければなりません。教会で教えられているように、どんなことであれ私たちができる最善を尽くす必要があります。私はこれを信条にして努力しています。」

前中央日曜学校会長であり、心臓外科手術の草分け的存在であるラッセル・M・ネルソン博士（現LDS病院心臓外科医）は、この手術を評して「勇気と犠牲の画期的な模範である」と賞賛し、医学の進歩に貢献すべく開拓者精神を持って臨んだドブリース博士やチームを組んだ人々、同様に患者であるクラーク博士やその家族の勇気を称えた。

最初の人工心臓手術を受ける患者を捜す

に当たり、生きようとする強い意志の持ち主で、病態が重症であることを十分に認識し、なおかつまだ実験の段階でもある手術のもたらず結果を甘受できる人が求められた。クラーク兄弟がそのすべての条件を満たすと判断されたとユタ大医学センターの関係者は伝えている。

クラーク兄弟のホームティーチャーであり、家族と長年親しくしているワシントン第1ワード部のラルフ・ウイリー兄弟は、クラーク兄弟について次のように語っている。「これまでずっと健康で、仕事でも成功を収め、多くの事をなし遂げてきました。隣人への愛と献身的行ないは、これまでの行動が証明しています。生き続けて、より良いことを行ないたいという強い気持ちを抱いていると私は確信しています。」

手術を前にして、クラーク兄弟の家族のふたりが彼に祝福を与えたが、同センター副所長のピーターソン博士も共に祈りに加わった。（Church News, Dec. 11, 1982）

人工心臓、初の移植に成功



永久使用めざし

61歳不慮の男

人工心臓の現場を見た

所長も
10/1 曜
西

読売新聞 一九八二・三・三

発見されたマーテン・ハリスの 手紙、モルモン経の証を立証

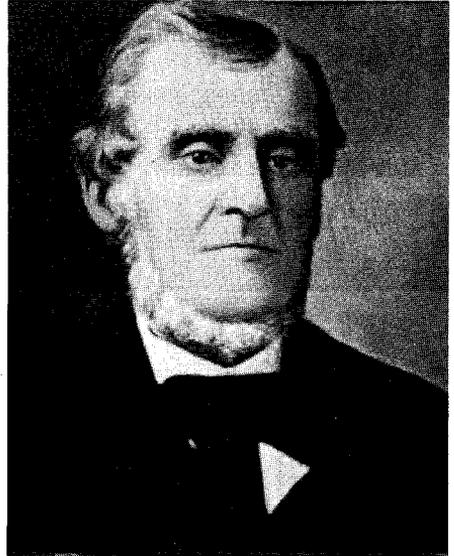
マーテン・ハリスの署名入りの手紙が、ユタ州プロボ市在住の弁護士ブレント・F・アシュワース兄弟によって所有されていることが明らかになった。この手紙はモルモン経の翻訳の原本である版の見証者、マーテン・ハリスの証を立証するものである。

マーテン・ハリスの息子マーテン・ハリス・ジュニアによる肉筆の手紙には、当時89歳になっていたモルモン経の見証者マーテン・ハリスによる署名がある。この手紙は1873年1月13日、ユタ州キャッシュ・カウンティのスミスフィールドで、ブリガム・ヤング大管長の義理の息子であるウォルター・コンラッドにあてて書かれたもので、内容は次の通りである。

スミスフィールド
キャッシュ・カウンティ、ユタ
1873年1月13日

ウォルター・コンラッド兄弟

拝啓——兄弟のお手紙を大変ありがたく頂戴致しました。今、喜びをもってこのご返事をしたためております。モルモン経による影響が広まりつつあることを耳にするのは本当に喜ばしいことです。そして上述の本について、兄弟が私の証を述べるよう



▲モルモン経の真実なことを証した3人の見証者のひとりマーテン・ハリス (1783—1875)

切望なさいましたので、ここに慎んで申し上げます。私とその古代の記録を現わして下さるよう主にお祈りしていましたが、聖なる天使が目の前に現われました。そしてそのお方の前にあるテーブルの上には、聖なるもの、つまりウリムとトミム、その他ニーファイの民の古代の遺物が置かれていました。天使はその版をお取りになり、

見やすいようにこちらに向けられました。すると「私は主である」という天からの声が聞こえ、この版は人間によってではなく神によって翻訳されたものであり、私たちはこの記録を全世界に広める必要があることが告げられました。このようにして示現が終わりました。

さて愛する兄弟、あなたが私の顔をご覧になって、私がうそをついているのでもなければ、欺かれているのでもないということをお感じになられたらと思います。しかし、このわずかな文章だけで筆を置くことはみ旨にかなうものなのです。敬具

マーテン・ハリス

マーテン・ハリスの証は1830年3月のモルモン経の初版の時からどの版にも印刷されており、またその証を再主張するインタビューも、これまで幾つか出版された。しかし彼の署名のある声明が発見されたのは、1830年以来この手紙が初めてである。

教会歴史部の部長であり、七十人第一定員会会長のG・ホーマー・ダラム長老は、この手紙が大変貴重であり、教会が有する証拠書類として重要なものであると述べている。つまりこの手紙は、天使の訪れを受け、モルモン経に関する事実を目撃したマーテン・ハリスの証を側面から証拠づけるものとなっているのである。

歴史文書を収集しているアシュワース兄弟は、この手紙を約9カ月前に入手し、以来その信憑性について調査してきた。その結果、この手紙がこれまでに少なくとも3人の手を経てきていることが明らかにな

っている。彼はこの手紙を大管長会と教会歴史部に提出した。

この手紙の筆跡は、マーテン・ハリスと彼の息子の世に知られている筆跡と比較して、その信憑性を十分に立証し得るものである。

ウォルター・コンラッドにあてたこの手紙は、罫線の入った便せんに消えない鉛筆で書かれている。また手紙の入っていた封筒には「ウォルター・コンラッド、第20ワード、ソルトレーク・シティ、U.T.」というあて名書きが見える。(U.T.とはユタ準州の略字)

マーテン・ハリスはニューヨーク州パルマイラの町の裕福な農夫だった。そしてここで、後に大管長となったジョセフ・スミスの家族と知り合う。

1829年、ハリスはモルモン経を5,000部出版するための資金3,000ドルを調達するために農場を抵当に入れたが、当初はモルモン経の売れ行きが思わしくなく、負債を支払うために農場を手離してしまう。

教会が正式に組織されて5年を経た1835年、マーテン・ハリスは十二使徒の聖任に参加した。その後教会が発展し、西部への移動を開始したので、マーテン・ハリスは当時教会本部が置かれていたオハイオ州カートランドに移った。そして新しい教会本部のあるユタ州に移るようにとの息子からの要請を断わり、約25年間カートランドにとどまった。しかしついに1870年の末近くになって、マーテン・ハリスは息子の願いを聞き入れてユタ州キャッシュ・カウンティに移住、マーテン・ハリスは1875年7月10日に92歳でその生涯を閉じた。

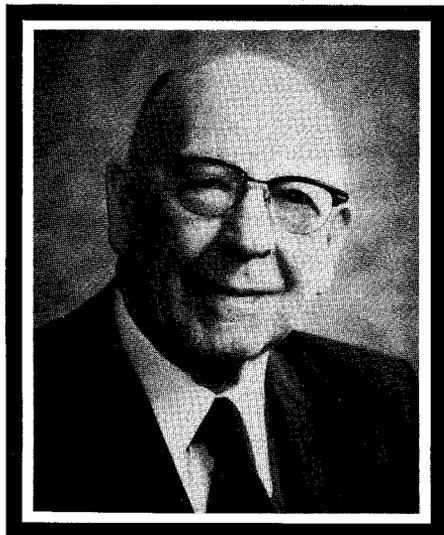
「永遠の宣教師」 リチャード・リチャーズ 長老逝く(96歳)

去る1月14日、十二使徒定員会会員リチャード・リチャーズ長老の葬儀が、ソルトレーク・タバナクルで行なわれた。リチャーズ長老は1月11日に令嬢宅で息を引き取られたが、それは2月7日の97歳の誕生日を迎える直前の出来事であった。

葬儀にはスペンサー・W・キンボール大管長も出席し、秘書のヘイコック兄弟がメッセージを代読した。タバナクルを埋めた何千人もの人々は、最長老の教会幹部として長い間重責を果たしてきたリチャーズ長老に深い感謝の念を寄せた。

バッカー長老はこう述べている。「私たちはこの愛すべき人の目を通して、教会の歩みを見る思いがします。リチャーズ長老はジョン・テイラー大管長の時代に生まれ、7歳の時にソルトレーク神殿の献堂式に出席されました。長老は当時の模様を実に鮮明に記憶しておられました。またスノー大管長がセントジョージで什分の一に関する啓示を受けた時は、14歳でした。」

キンボール大管長は弔辞の中でリチャーズ長老をこう称えた。「彼の心の底から湧き上がってくるメッセージはいつも機智と知恵にあふれたもので、私たちに勇気を与えずにはおかないものでした。その力強いメ



ッセージは、常に最も適切な聖句によって裏打ちされ、泉のごとく湧き出る証はとどまるところを知りませんでした。全末日聖徒にとって、リチャーズ兄弟は、希望と真理と義の錨でした。」

最後にリチャーズ長老のご子息であるラモント・リチャーズ兄弟が、リチャーズ長老の証を引用した。「私は全身全霊を通してこの業が神の業であり、永遠の父なる神がこの業の行く末を定めておられることを証します。この教会は私たちの主であるキリストをかしら石に、使徒と予言者という土台の上に建てられたものです。主は今日この教会を導いておられ、それは予言者たちが宣言したように主が天の雲に乗って、降臨されるまで続くでしょう。この証をイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。」

旭川・札幌の2会場で公演 第2回クリスマスミュージカル

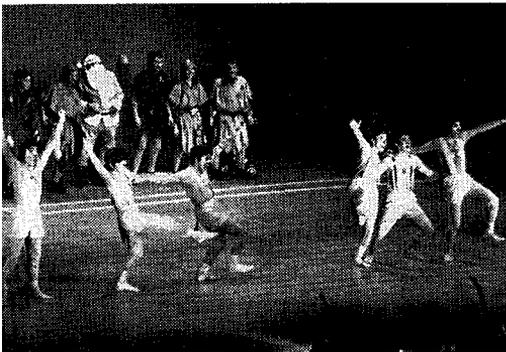
主催●札幌伝道部、札幌ステキ部、札幌西ステキ部



▲宣教師30名・地元教会員10名によるクリスマスミュージカルの公演（旭川市民文化会館で）

12

月10日、15日の両日、札幌伝道部、札幌ステキ部、札幌西ステキ部
合同の主催によるクリスマスミュージカル
が催されました。多くの人にクリスマスの



外人青年による多様なプロ
グラム盛り込んだクリスマス
にちなみミュージカル公演
が、十日夜、旭川市文化会館
で開かれ、寒風凛冽な約九百
人がひと足早いクリスマスの夕
べを楽しんだ。

本日は使徒イエス・キリスト教
会が、クリスマスの本々の意味
を知ってもらおうと、昨年の
札幌公演に続き旭川でも催し
た。米田から一年半、伝道の大
め札幌に来ていた十八歳から二
十歳までの男女青年三十八人
が、地元住民らの応援で、楽し

伝道中の米国 青年ら大熱演

クリスマスに合わせて、舞台ッ
ぱに若さあふれる踊りを見
せた。八月から精進してきた
けど、果しとは思われなはずテ
ィンで、招かれた舞臺施設、青
年團の子らも拍手を取りなが
らクリスマス・ソリヤトナカ
イ行進のシン・目を見張って
いた。ミュージカルの高揚テ
レセント曲会や和書の結行
われた。

若さあふれる國の青年の歌
や踊り

クリスマス祝いミュージカル

北海道新聞 57・12・11

本当の意義を知ってもらおうと始められたこのミュージカルも2回目を迎え、今年は札幌、旭川の2会場での公演となりました。

宣教師と会員が同じ目的に向けて一体となり、練習も2カ月前から始められました。その間、脚本にも何度か手が増えられ、いろいろな面で多くの方々の献身的な働きと犠牲がありました。特に初めての試みであった旭川への移動公演の際には、地元旭川の会員の皆様が快く協力を申し出て下さり、旭川でのキャスト・スタッフ探し、会場の準備、宣伝ポスター作り、札幌よりのスタッフの宿泊の手配など細かい心配りのお陰で、当初困難に思えた計画もスムーズに運ぶことができました。

12月10日当日には、会場となった旭川市民文化会館において、午後6時30分より若さあふれるステージが披露されました。会場には招待した福祉施設、母子家庭の子供たちを交え900余名の観客が集まり、共に楽しいひと時を過ごしました。翌朝の北海道新聞朝刊にはその模様が紹介され、多くの人々に公演の楽しさを知っていただけました。何よりも福音の持つ素晴らしさ、またそれを自らの生活の糧として生きる喜びをこのプログラム的一端を通して感じる事ができました。

12月15日(水)に行なわれた札幌での公演(会場：札幌市教育文化会館大ホール、収容人員1,100名)でも、会場を一杯に埋め尽くした人々から盛んな拍手を受けていました。(レポーター：札幌伝道部宣教師・折田修長老)

私 は今、小学校の3年生です。この前勇者のクラスで、2マイル行くことについて習いました。2マイル行くことは、進んで仕事をする事です。たのまれたことだけ仕事をするのは1マイルです。天のお父様やみんなからよろこばれるためには、どんな仕事があるか考えてみました。

私には兄とふたりの姉と弟がいます。みんな家の中でする自分の仕事があります。お兄ちゃんは力のいる仕事や、お父さんがする草取りやしばかりの助手をします。弟も手伝います。私たちはお母さんの手伝いをします。食事のじゅんびやかたづけ、洗たく物のおかたづけやそのほかにたくさんあります。

毎日することは夕食のあとかたづけです。上のおねえちゃんは食器を洗います。二番目のおねえちゃんはふく係です。私は全部それをかたづけます。だれかひとりでもなまけると台所はいつまでもかたづかないし、仕事が先に進みません。

おねえちゃんたちがテストでたくさん勉強をしなければいけない時や、宿題がいっぱいある時、私は自分から進んで食器を洗ったりふいたりし

こどものひろば

ます。今まで洗ったことがない大きなおさらとか、重くてかたっぽの手で持てないどんぶりも洗います。おかたづけする時は両手で持つので、重いと思ったことはありません。でも洗う時はかたっぽの手で洗ったり

2マイル行くこと



仙台ステーキ部山形ワード部

小学3年

河村 美穂

持ったりするので、とてもたいへんです。お仕事をしないでテレビを見ていたいと何回も思いました。でもそういう時いつも2マイル行くことを思いました。

「毎日少しずつ長い間がんばるこ

とはとても大事なことだし、天のお父様もよろこんでくださるのよ」と、お母さんは話してくれました。きれいに整とんされたお台所はとても気持ちがいいし、私も2マイル行くようにがんばったと思うと、自分の心の中もとても気持ちがよくなります。

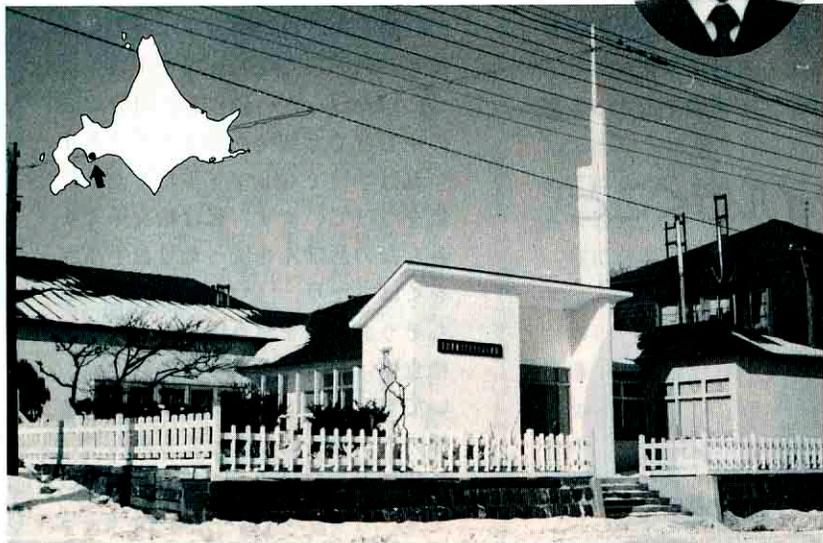
私は学校でも2マイル行くように気をつけています。私は給食係です。みんなのおぼんを洗ったりお手ふきをくぼったり、「いただきます」「ごちそうさま」を言う係です。放課後、給食係はおぼんを洗ってきれいにふいて整とんしてから帰ります。同じ係の人が帰ってしまったても遊んでいる時でも、私は自分の係の仕事をします。

自分のまわりに仕事がないかと気をつけてみると、たくさんあります。花係の人は花びんの水をとりかえません。お花がかわいそうです。私は自分の仕事がおわり、みんなが帰ってから、花びんの水をとりかえます。だれも見なくても天のお父様はちゃんと見ていてくれることを、私は知っています。これからも2マイル行くために私はがんばります。イエス様のお名前であかしします。アーメン。(かわむら・みほ)

室蘭西支部設立



◀室蘭西支部の教会堂と川上輝男支部長(写真上)。室蘭の地で伝道が開始されてすでに三二年の歴史がある。菊地長老、柏倉地区代表の出身地でもある。



19

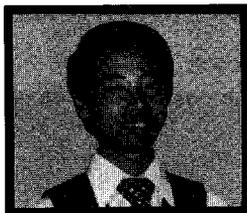
82年12月5日、待ちに待った室蘭西支部が、菊地敏ステーキ部長、佐藤義紀副ステーキ部長の訪問の下、会員に提示され正式に組織されました。第一副支部長に村上完治兄弟、第二副支部長に小室秀樹兄弟が召されました。

これまでは伝道部管轄下のユニットであったため、会員が少ないばかりでなくプログラムも変則的なものでしたので、十分な活動がなかなかできない状況にありました。支部には現在、35名の登録会員がおり、正式なプログラムが行なえるように目下組織を強化訓練している段階です。各会員も、

以前にも増してよく責任を果たし、今度はワード部を目指そうと頑張っています。

建物は以前の室蘭支部が使用していた物を受け継ぐことになりました。(室蘭支部は現在ワード部となり、4年前に市内宮ノ森に教会堂を新築、1982年12月に増築が完成し、移転しました)

32年の伝道の歴史を持つこの室蘭の地で、福音がさらに市民の中に浸透し、ひとりでも多くの人々に受け入れられるよう、宣教師と一体となって力を尽くしていきたいと思えます。(レポーター：札幌西ステーキ部室蘭西支部長・川上輝男・45歳)



阿南支部長 (名古屋ステーク部 西尾支部) の 死を通して

19 82年12月28日、名古屋ステーク部西尾支部の阿南幸男支部長は、交通事故により入院先の病院において30年の生涯を閉じた。

阿南兄弟は、1971年12月26日に改宗して以来教会において多くの職を歴任し、1977年には岡崎支部の支部長に、さらに翌年、名古屋ステーク部が組織された時には、岡崎第2ワード部の初代監督に任命された。その間、三河地方で最初の教会堂の建築を指揮するなど、大きなビジョンを持って三河の教会の発展に多大の貢献をした。現在の豊田、刈谷、安城、西尾の各支部が分離独立していったのは彼が管理していた時代の岡崎ワード部からであった。

隣接の西尾市に1979年に転居した後も、岡崎ワード部の教会堂の管理人として精勤する一方、高等評議員や西尾支部の支部長としての召しに力を振るった。

1982年11月6日、岡崎ワード部から西尾市内の自宅に単車で帰る路上で交通事故に遭い、病院に収容された阿南兄弟は、岡崎の監督会、長老定員会の素早い対応によって、ステーク部内のみならず名古屋ステーク部の多数の兄弟姉妹の供血を受けつつ、腎臓摘出、右脚の複雑骨折の緊急手術を受けた。この手術の後も危険な状態は続き、大きな手術を繰り返した。その間、岡崎と西尾の会員は交代で御家族と一緒に病院に

泊まり込むなどの援助を続けた。阿南兄弟自身もまた、すでに臨月になっていた阿南姉妹や、大分から駆けつけ、付き添っておられたお母様をいつも気遣っておられた。

(1975年に結婚された智子姉妹との間に、7歳を頭に3人のお子さんがあったが、彼の入院中に健康な第4子が誕生した。その子は「まりあ」と名付けられた)

岡崎ワード部の機関紙「シオン岡崎」によれば、彼の病名は実に左腎破裂、後腹膜出血、出血性ショック、急性腎不全、肝不全、敗血症と6つに上った。御家族や多くの友人たちの祈りの中で、並み外れた精神力と体力で奇跡的ともいえる53日間を勇敢に死と戦い続けた阿南兄弟は、12月28日午後2時、ついに息を引き取った。

翌29日に執り行なわれた葬儀には、年の瀬にもかかわらず、岡崎の広い礼拝堂を満席にする参列者があった。入院中ベッドに縛り付けられてもなお彼の示す細やかな愛情は、医師、看護婦の方々に「あの人は本当によくできた人です」と感嘆させたという、そんな彼の偉大さを偲び哀悼の念をさらに深くした。

残された私たちは、彼の霊的な遺産をさらに大きく発展させてゆくと同時に、一人一人が日の栄の王国で、彼と再び相まみえるために、義しい生活を忍耐強く続けて行くべく決意を新たにした。(レポーター：名古屋ステーク部ステーク部長・土田勝)



◀三樹御家族
▼小笠原御家族のパテスマ会



ある家族の改宗の手助けをして

高松ステーキ部松山ワード部
三樹 世津子

昨年12月初め、家業の写真撮影業も年末で何かとあわただしい時期でした。早朝、けたたましい電話のベルで目が覚めました。「三樹姉妹ですか。こちらはスナ一長老ですが、今夜、求道者の家族のレッスンを手伝って下さいませんか。」

私はまだ眠たい目をこすりながら、きょうの予定はどうだったかなあとあわてて考えました。その日はPTAの用事で一日中予定が入っていましたので、夕方から家を出て行くのはちょっと無理な状態でした。

「商売をしているところでは年の瀬は忙しいことを、長老たちにどう説明したらよいのかしら。もっと早く連絡してくれたら良かったのに……」などとそんな思いが一瞬、

脳裏をかすめました。が、あわてて打ち消すように、「はい、何とかして行きます」と約束し、求道者の住所とお名前を確認しました。その方は我が家と同じく3人の娘さんとの4人暮らしをしていらっしゃるとのことでした。

初めて訪問した時、御主人がいらっしゃるのでお仕事で帰りが遅いのですかと伺いましたら、今は事情があって離別していらっしゃることや、ふたりの宣教師が初めてドアをノックして入って来た時のことなどを話して下さいました。その時はまだ宣教師を受け入れる気持ちはなく、ドアを固く閉めて追い返したそうです。その後いろいろな事情で別れることになり、現在の住



まいに引っ越してこられました。昨秋のある日、そこへ再びふたりの宣教師がドアをノックしたのです。

スナー長老はその時の模様を、「私たちはその辺りを何軒も戸別訪問して伝道していたのではなく、小笠原家族の家の前に来た時、どうしてもドアをノックしてみたいという気持ちにかられたのです」と語っています。それは今思えば、神様の導きとしか言いようのないことです。小笠原姉妹は快く彼らを導き入れ、それからレッスンを始めました。

3人のお子さんは、毎回私たちの訪問を喜んで受け入れてくれ、長老たちの深い愛に浸っているようでした。彼らは子供たちによく理解できるように、手持ちのクッキーや紙、鉛筆を使って、教会の戒めを分かりやすく教えました。傍らでその様子を見聞きしていた私は、長老たちの上に神様の特別な力が加わっているのを強く感じました。

複雑な事情で母子家庭である家族に、長老たちで足りない分を私が橋渡しをしてレッスンできたことは、私にとって伝道する喜びを体一杯味わえた素晴らしい経験でした。私もかつて改宗してすぐ伝道に出ようと準備をし、支部長さんとの面接も終えたところで今の主人と巡り会い、結婚したという経緯があります。その後しばらくの間、伝道に出なかったという思いや悔いが続きました。しかし、私たちはあらゆる機会を通して地域の人々に福音を宣べ伝え、日本語が十分でない長老たちを助ける機会があることを痛感し、日々の生活の中で持てる時間を伝道に奉仕したいと思うようになり

ました。

ワード部で行なわれたクリスマスパーティーには、小笠原姉妹も職場を同じくする友人の方と一緒に来られました。「三樹姉妹、私の世界は闇から光へと導かれ、毎日が生き生きとして喜びで一杯です」と誇らしげに語られ、12月末になると3人の子供たちも一日も早くバプテスマを受けたいと言うようになりました。

明けて58年1月2日の安息日、小笠原姉妹と子供たちはバプテスマの門をくぐられました。「私は階段から転げ落ちるように不幸な思いと生活に陥りましたけれども、神様は私たちをお見捨てにはなりませんでした。私はこれから望みを抱いて3人の娘と歩むことができます。私たちに深い愛を示して下さい本当にありがとうございます」という姉妹の証と、子供たちの短い証を聞く頃には、私はもう涙があふれ、閉会の讃美歌も歌えないほど熱いものが込み上げてきました。主が祝福されていることを強く感じました。

愛を分かち合うクリスマスの季節に長老たちと共に福音を宣べ伝える業と証する機会に恵まれたことを、心から主に感謝します。そして小笠原家族の謙遜でひたむきな祈りがこれから後も主に聞き届けられんことを願っています。

末日聖徒イエス・キリスト教会の教えが人々の成長を助けるものであることを確信し、主が逆境の時も順境の時も分けへだてなく一人一人を見守り、導き、祝福して下さいることを心から証します。(みつぎ・せつこ 38歳、高松ステーキ部プライマリー会長)

TDC移転の お知らせ

資

材管理部東京ディストリビューション・センター（TDC）は3月31日より3部門に分かれ、移転することになります。

すでに第一陣として、配送課は昨年の11月中旬に移転を終えており、引き続き翻訳課（翻訳・制作）と販売部門は3月28日から3日間の子定でそれぞれ下記の住所に移転します。

■販売部門

末日聖徒イエス・キリスト教会
資材管理部渋谷ブックセンター
〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8
TEL 未定

- 教会出版書籍・視聴覚教材の注文処理、店頭販売、オーディオ部門
（教育部、社会福祉課、教会ユニットを含む）

■翻訳課（翻訳・制作）

末日聖徒イエス・キリスト教会
資材管理部翻訳課
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
教会地域管理本部（PBO）
TEL (03)440-2351

■配送課

末日聖徒イエス・キリスト教会



▲3月31日オープン予定の渋谷ビル。地下1階地上5階建て焦げ茶色のレンガ風作り

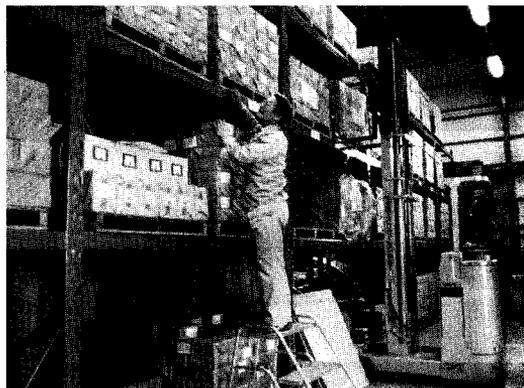


資材管理部配送センター

〒144 東京都町田市小川1704-1

TEL (0427)96-2820

- ☞注文は、すべて渋谷ブックセンターで受け付け、町田の配送センターから各ユニットに発送されることとなります。ただし、視聴覚資料の16ミリ映画のみ渋谷ブックセンターから発送されます。
- ☞限定品の注文は渋谷ブックセンターで受け付けますが、ブックセンターには限定品のストックを置いていないため直接店頭でお渡しすることができません。すべて配送センターからの発送になりますので御注意下さい。
- ☞渋谷ブックセンター店頭販売の営業時間
火曜日～金曜日 10:00 a.m.～6:30 p.m.
土曜日、祭日 10:00 a.m.～4:30 p.m.



▲資材管理部配送センター（町田）

☞PBOの販売コーナーは廃止されます。

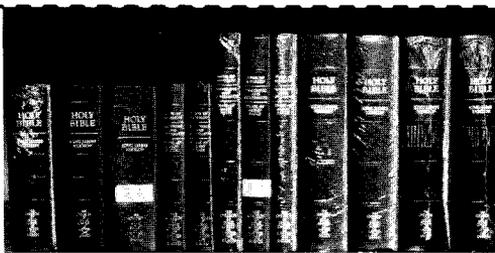
☞電話でのお問い合わせは下記へ

- 注文・「聖徒の道」の予約購読とお支払い等については…未定(渋谷ブックセンター)
- 配送については……(0427)96-2820

新刊紹介

編集室から

- ◎各ワード部・支部を紹介するページを設けたいと思います。特に監督・支部長からのお便りをお待ちしています。
- ◎「こどものひろば」には、学校や家庭で体験した子供たちの証などを掲載しますので、初等協会の先生方や両親の方々のご協力をお願いします。
- ◎5月号掲載分締切は3月18日（TDC必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入して下さい。宛先：〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/TDC「聖徒の道」編集室。3月28日以降は教会地域管理本部に送付して下さい。

聖書・英文—末日聖徒イエス・キリスト教会
編纂欽定訳

- 大型(A5変)黒・茶の2色(革装)各5600円
(合成革装)各2600円
- 中型(B6変)黒・茶の2色(革装)各4200円
(合成革装)各1800円

末日聖典合本・英文

- 大型(合成革装)黒・茶 各1800円
- 中型(合成革装)黒・茶 各1200円



仕事を通して私が得たこと

札幌西ステキ部室蘭西支部
浦和信販会社勤務 下 部

早川 則子
付 属 函 書 館

バ プテスマを受けた翌日、1981年12月2日に、ある信販会社への就職が決まりました。二重の喜びに、私は神様に感謝する気持ちで一杯になりました。

意欲と希望に胸ふくらませ、いよいよ仕事が始まりました。しかし仕事を一つ一つ覚えていくにつれ、考えていたほど甘いものではないことに気がつきました。それに加えて、ほとんど毎日のように残業があります。早くて6時か7時、遅い時には9時頃まで残業したこともあります。

仕事時間のほとんどは、お客様からの苦情や問い合わせの電話の応対に費やされます。一件一件調べ、事情を説明しておわびしなければなりません。ほとんどの方はすぐにご理解いただけるのですが、中には電話口で怒鳴り散らす方もいます。そんな時はとても悲しくなります。

また、お支払いの遅れている人に電話でお知らせします。私が一番無くなって欲しいと思う仕事です。6万円のじゅうたんを買い、支払いが遅れたばかりに合計で20万円近くも請求された人がいました。家財は差し押さえられ、大切な家庭がめっちゃめっちゃになってしまった人も少なくありません。何も知らずに入社し、社会の厳しさを急に目の当たりにしたようでショックでした。

私はだんだんと、「こんな会社に入るのではないか」と思うようになりました。そんな時に励まし導いて下さったのは天のお父様です。心から祈ることによって、私は常に良い方に物事を考えることができました。「聖徒の道」1月号の平田富美子姉妹の証の中に、「残業をしたいが、女子社員ということで多くの時間残業することがなかった」と書かれてありましたが、私には残業する機会が多くあり、その分を伝道のための資金として蓄えられる自分の境遇に心から感謝しました。そして「どのような事があってもお金は借りない。使う時はよく計画を立てる。無駄使いはしない」と決心し、お金と時間を管理することの大切さを学びました。

私は一日に何十人もの人と電話を通してお話する機会があります。顔は見えなくてもいつも笑顔でいたいと思います。多くの人々に心から優しく、思いやりと愛をもって接することはどんなに素晴らしいことでしょう。教会員として周りの人々の良き模範となるよう努力したいと思います。今私は、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることを本当にうれしく思います。これからも仕事と信仰を両立させ、毎日が伝道だという気持ちで頑張りたいと思います。
(はやかわ・のりこ 19歳)



末日聖徒
イエス・キリスト教会

大阪北ステークス池田ワード部教会堂 1982年7月20日完成



表表紙：中央扶助協会会長バーバラ・B・スミス
(中央)，第一副会長マリアン・R・ボイヤー(左)，
第二副会長シャーリー・W・トーマス(右)。裏表紙：
世界各国からの扶助協会代表の姉妹たち